ロベール・ブレッソンのシネマトグラフと現代社会

―― ブレッソン作品における個人と社会に関する社会学的考察 ――

叶　堂　隆　三

目　次

はじめに
1. ブレッソン作品の特徴
2. ブレッソン作品と社会―作品に対する社会学的視点
3. 農村をロケーションにした映画
4. 都市をロケーションにした映画
5. ブレッソン作品における個人と社会

はじめに

ロベール・ブレッソン（1901-1999年）は20世紀中後期に14本の映画を製作したフランスの映画監督である。画家から転じた映画監督で、「絵画はじつに多くの恩恵をもたらせてくれました。映画をやる気にさせてくれたのも、映画の作り方を教えてくれたのも絵画でした」（ブレッソン2019年15頁）と語るように、構図の安定性やモノトーンの映像美、暗闇の中を走る光に満ちた船やバス、トラムの映像に特徴がある。

また、ドイツ軍に収監された経験を持ち、監獄等を舞台にした作品を多く手がけている。その一方、宗教世界、すなわちカトリック教会等の宗教施設やミサの光景が多く描かれ、司祭（神父）や修道女が多く登場し、カトリック系の映画監督とされる。

一般に、ブレッソンの作品の特徴は、宗教性（ジャンセニズム・ヤンセニズム）が反映し、大衆的な展開に乏しい点にあると言われている。本論では、ブレッソン作品に描かれる個人と社会に焦点を当て、映像の中から、個人と社会、社会的世界の諸相の解明をめざすことにしたい。

1. ブレッソン作品の特徴

ブレッソンは多くの映画賞を受賞した世界的に評価の高い監督である。その一方、独特の映像世界は大衆性に乏しく、作品数は多くない。まずブレッソンの作品と映像の特徴についてふれたい。

(1) ブレッソンの作品

ブレッソンの最初の監督作品は、表1のように1934年の『公共問題』である。長い間、この映画の所在が不明であったため、1943年の『罪の天使たち』が最初の作品とされることがある（ブレッソン2019年21頁）。1940年代、この『罪の天使たち』と『ブローニュの貴婦人』の2本が製作されている。

1950年代、『田舎司祭の日記』『抵抗』『スリ』の3本の作品が製作されている。ブレッソンは『田舎司祭の日記』の後、自らの作品を「シネマトグラフ」と呼ぶようになる（ブレッソン1987年8頁）。それは、モンタージュ等の映像技法と登場人物の過剰な演技を抑止した演出、独特の音響の追求を特徴とする姿勢を指す彼の造語である。この時期の作品のうち『抵抗』『スリ』は、監獄や刑務所が主要なシチュエーションである。

1960年代、ロバを主人公にした『バルタザールどこへ行く』や『少女ムシェット』『やさしい女』等4本の作品が製作される。1970年代、『白夜』『湖のランスロ』『たぶん悪魔が』の3本が製作され、ブレッソンの遺作となるのが、1983年の『ラルジャン』である。

(2) ブレッソンの作品の映像的特徴―シネマトグラフ

ブレッソンは、1950年代以後、自分の作品をシネマトグラフと呼び、モンタージュ等の映像技法と独特の音響をめざし、また出演者を「モデル」と呼ぶようになる。

① シネマトグラフ

ブレッソンが言うシネマトグラフとは、フランスのリュミエール兄弟によるスクリーン投影方式ではなく、ブレッソンによれば、「運動状態にある映像

表１　ロベール・ブレッソンの作品

	映画	制作年	時代設定	原作	結末	収容施設等の生活	備考
1	公共問題	1934	—	—	—	—	短編（25分）。1987年にシネマテーク・フランセーズで発見。
2	罪の天使たち	1943	現代	○	主人公の死（病死）	女子修道院	
3	ブローニュの貴婦人たち	1945	現代	ドゥニ・デドロ	愛を知り、生きる	＊貧困生活	18世紀の原作を現代の時代設定に変更。
4	田舎司祭の日記	1951	現代	ベルナノス	主人公の死（病死）	＊教会・司祭館	ルイ・デリュック賞・フランスシネマ大賞・ヴェネチア国際映画祭国際賞
5	抵抗	1956	現代	アンドレ・ドヴィニ	自由（脱獄）	監獄	
6	スリ	1959	現代	○	愛を知る（収監）	監獄	
7	ジャンヌ・ダルク裁判	1962	15世紀	裁判記録	主人公の死（処刑）	監獄	
8	バルタザールどこへ行く	1966	現代	○	主人公のロバの死 主人公マリーの失踪	＊ロバの過酷な就労	ヴェネチア国際映画祭審査員特別賞・国際カトリック映画事務局賞・イタリア批評家賞・サン・ジョルジョ賞・シネマ・ヌオヴォ賞・ジョルジュ・メリエス賞
9	少女ムシェット	1967	現代	ベルナノス	主人公の死（自殺）	＊貧困家庭	カンヌ映画祭審査員特別表彰・国際カトリック映画事務局賞・ヴェネチア国際映画祭イタリア批評家賞・ジョルジュ・メリエス賞
10	やさしい女	1969	現代	ドストエフスキー	—	—	
11	白夜	1972	現代	ドストエフスキー	—	—	
12	湖のランスロ	1974	—	クレディアン・ド・トロワ	主人公の死（戦死）	—	伝説。カンヌ映画祭国際批評家連盟賞
13	たぶん悪魔が	1977	現代	○	主人公の死（自殺）	警察（取り調べ）	ベルリン国際映画祭銀熊賞
14	ラルジャン	1983	現代	トルストイ	主人公の逮捕（殺人）	刑務所	カンヌ国際映画祭監督賞・カイエ・デュ・シネマ誌ベストワン・全米映画批評家協会賞監督賞

注：原作の○はブレッソンのオリジナル作品を示す。収容所施設等の生活の＊は、主人公の生活状況を示す。なお、『ブローニュの森の貴婦人たち』は主人公の一人の家庭状況である。

と音響を用いたエクリチュール」（ブレッソン 1987 年 8 頁）で、シネマトグラフの語尾のグラフ＝エクリチュール（書くこと、描くこと）に映画独自の表現方法を込めているという。一方、「シネマ」とは、ブレッソンによれば、撮影された演劇を意味する否定的用語である。

ブレッソンは、『田舎司祭の日記』以後、シネマトグラフと称する表現方法、すなわちモンタージュ等の映像技法と登場人物の過剰な演技を抑止した演出、独特の音響によって作品を製作していく。このうち映像技法に関しては、50 ミリカメラを専用し、移動撮影（トラベリング）やパンの使用を制限する。その一方で、『抵抗』や『スリ』の手のクロース・アップ、暴力シーンの別映像や音での代替も特徴になっていく。この点について「疾走する馬の躍動感を表現したい場合、私は強靭な胸と後半身しか見せません」「何を見せて何を見せないか、とくに何を見せないかを誤ってはいけません」（ブレッソン 2019 年 69・355 頁）と述べている。

② モンタージュ（編集）

作品の第一の特徴は、モンタージュである。ブレッソンは、モンタージュを単にクロス・カッティングの意味でなく編集の意味で用い、カットの結合が映画独自の表現方法であると断言し、「モンタージュとは、映画の視覚的、音響的要素を配置すること、それらをこの上もなく正確な位置に置くことです。諸要素は別々に捕まえられ、私のシステムのなかで互いに接触させられて、生命と奥行きを得るのを待っています」（ブレッソン 2019 年 109 頁）と語っている。なおモンタージュによるシーンやシークエンスの切り替えに、フェイドイン・アウトが残存する映画も多い。

③ 過剰な演技の抑制―モデル

作品の第二の特徴は、アマチュアや無名俳優の配役である。ブレッソンは出演者をモデル（主人公）と呼び、「見せかけること（俳優）ではなく、在ること（モデル）」（ブレッソン 1987 年 5 頁）と識別する。具体的には、「アマチュアや新人俳優は、職業俳優よりも自意識が希薄で、素直で真っすぐなうえ忍耐強いので、職業俳優よりもずっと好意的にそうした試練に身を委ねてくれます。……人々が彫刻家や画家のモデルについて抱いている観念と似たところがあります」（ブレッソン 2019 年 57-8 頁）と述べている。

ポール・シュレイダーによれば、この演出方法は日本の映画監督、小津安二郎に類似するという。すなわち、「ブレッソンの俳優の扱い方は小津のそれに非常に似ており、まったく同じ動機を持っていた。ブレッソンも小津も、俳優の演技からあらゆる表現を排除しようと努力した。そして、俳優が伝えるべき感情の“ヒント”あるいは説明を俳優に与えないで、ただ正確な肉体上の指図を、つまり、頭をどのくらいの角度で傾けておくか、いつ、どのくらい手首を曲げるか、といった指図をしたのだ。二人はともに、俳優の持ち前の頑固な自己表現を“消耗”させてしまうために、何度もくりかえして稽古をやらせ、しだいに、新鮮な動きを機械的な動作に、表現豊かな声の抑揚を穏やかな単調さに、変えたのである」（シュレイダー 113 頁）と分析する。

もっとも、こうしたブレッソンおよびカット・バックを多用した小津安二郎の演出をモンタージュ（編集＝映像の接合）のしやすさという点から、技術的に理解することもできよう。

④ 音響―沈黙と雑音

作品の第三の特徴は、沈黙や生活音の存在感の大きさである。「トーキー映画は沈黙を発明した。絶対的な沈黙と、物音のピアニシモによって獲得される沈黙と」（ブレッソン 1987 年 58 頁）と語り、『スリ』における駅の騒音の場合、「『スリ』の背景となるパリの物音を、磁気テープにそのまま録音しても、聞くに堪えないごた混ぜにしかなりませんでした」「私は、現実の一部、現実のかけらを掴みとり、それらをある秩序に置くのです」（ブレッソン 2019 年 84-5 頁）とその方法を説明している。

(3) 社会から見るブレッソン作品の特徴―作品数とジャンセニズム

ブレッソンは生涯で 14 本の作品を商業映画として発表し、各作品の内容および製作本数は、製作－配給－興行という映画の生産過程の制約を強く受けてきた。表 1 のように多くの映画賞を受賞し、世界的に評価が高いにもかかわらず、作品数が少ないのは生産過程における制約が理由といえよう。またブレッソン作品の特徴といえる芸術的な質へのこだわりは、カトリック的志向性の一つであるジャンセニズム（ヤンセニズム）に由来することが指摘されて

きた。

① ブレッソンの作品数

半世紀にわたる監督生活であったが、ブレッソンの作品数は、表1のように14本とわずかである。ブレッソンによれば、作品数が少ないのは、映画企画の不採用や製作依頼の僅少さに由来する。この状況は、友人の資金提供で製作された最初の作品、短編映画の『公共問題』が「当たらなかった」（ブレッソン2019年16頁）ために生じたとされ、次の作品の『罪の天使たち』までに9年間の年数を要している。

映画の制作には、資金提供等を担う制作者（プロデューサー）や配給者（会社）の関与が大きい。ブレッソンの作品の製作は低予算であるため、本来であれば、映画製作上、有利である。しかしプロデューサー等に企画が採用されることは、困難であった。「私が寡作なのは、ただ単にプロデューサーを見つけるのにいつも苦労していたからです」「プロデューサーが企画に飛びついてくれないからです」（ブレッソン2019年159頁）と吐露し、実際、表1における12の『湖のランスロ』を5の『抵抗』の後に企画し、8の『バルタザールどこへ行く』の後に「撮りたいと思っています」（ブレッソン2019年73頁）と語っていたものの、企画が実現したのは1974年であった。

また、プロデューサーからの制作依頼も、多くない上に問題も生じている。転機となる4作目の『田舎司祭の日記』は注文仕事であったものの、「私のシナリオは、一般に映画的と判断される出来事よりも、そうした面（心象＝筆者注）にこだわるものでした。これが反感を買うことになったのです。当初のプロデューサーと別れて、別のプロデューサーを探さねばならなくなりました。プロデューサー探しのため、つい最近まで、私はどれだけ時間を無駄にしてきたことか！」（ブレッソン2019年169・252頁）と語る。また企画からはずされることもあった。1962年の『ジャンヌ・ダルク裁判』から1966年の『バルタザールどこへ行く』の間の4年間に、あるプロデューサーから、「『創世記』の冒頭（天地創造からバベルの塔まで）を撮って欲しいという注文もありました。私はこの注文に夢中になって、シナリオを書き、半年ほどイタリアに滞在し、30人もの庭師と一緒に地上の楽園を造成したりしました…。そのせいで2年分の仕事の時間を失ったばかりか、2年余計にスクリーンから遠ざかることになってしまいました。というのも『創世記』は結局、ジョン・ヒューストンの『天地創造』（1966年）となってしまったからです」（ブレッソン2019年231頁）と明かしている。

② ジャンセニズム

ブレッソンの作品では、表1のように、主人公や主なロケーションが修道女や女子修道院（『罪の天使たち』）、司祭や教会・司祭館（『田舎司祭の日記』）であり、また多くの作品でも司祭・司教・牧師が登場し、教会（聖堂）やミサのシーンが見られる。スーザン・ソンタグによれば、『罪の天使たち』の製作は「ドミニコ派の牧師（ママ）で作家のブルックビルガーに出会い、女の出獄者の世話とその社会復帰に尽力しているフランスのドミニコ会ベタニアのことを共同で映画にする話を持ち掛けられた」（ソンタグ204頁）のが契機という。ブレッソン自身が「私はキリスト教徒の映画作家です」（ブレッソン2019年317頁）と認めるように、ブレッソンの作品には信仰が色濃く表れているのが特徴である。とりわけ指摘されるのが、ジャンセニズム（ヤンセニズム）の影響である。この点について、ブレッソンへのインタビュアーの一人、ジョルジュ・サドゥールは「（同業の批評家たちの何人かと一緒になって）あなたに『ジャンセニスト』というレッテルを張りました」（ブレッソン2019年162頁）と述べ、シュレイダーによれば、アメデ・エイフル、アンドレ・バサン、ソンタグが作品の特徴を「ジャンセニズム的演出」「救済と至福の現象学」「精神的スタイル」と指摘している（シュレイダー113頁）。

ミシェル・クリスチャンによれば、ヤンセニズムはベルギーの司教のコルネリウス・ヤンセン（1585-1638年）に由来する教義である。ヤンセンはアウグスティヌスに関する著作の中で、原罪による人間の堕落と本当の自由の不在という予定説を主張し、その後、パリの修道院を中心にその教義が広まる。この教義はイエズス会と論争になるものの、一般信者には神学論を超えて厳格主義―聖体や儀礼への過度の崇敬―として広まった教義である（クリスチャン127-8頁）[1]。

実際、ブレッソンの作品の主人公・登場人物の多くは、邪悪さに引き寄せられるように暴力や犯罪を

重ね、表1のように、自殺や処刑を含む死や警察・監獄での拘束で終わっている。シュレイダーは、「ブレッソンは人物たちの人生の結末を予告してしまうことで、彼らの運命を予告する。そこでドラマは、人物（あるいは観客）が予定された運命を受け入れるか、入れないかということになる」（シュレイダー 152 頁）とドラマツルギーを分析し、さらに映像もジャンセニズムの影響下にあると見て、「ブレッソンの肖像画的技法はビザンティン美術の伝統下にあり、彼の運命予定、自由、および寵愛の神学はジャンセニズムの流れをくむものであり、彼の美学はスコラ哲学に由来する」（シュレイダー 173 頁）と断言する。

一方、ブレッソン自身は、自らに貼られたジャンセニストというラベルに関して、それは「装飾や過剰を好まず、無駄をそぎ落とした、裸のものを好むという意味」であると限定し、「私はジャンセニストだと言われますが、決してそんなことはありません……形式に関しては話は別ですが」（ブレッソン 2019 年 163・317 頁）と反論する。また神学論のジャンセニズムに関して、ブレッソンへのインタビュアーの一人であるジャン・リュック・ゴダールに対して、「われわれの生活は、予定説（プレデスティナシオン）……—つまりジャンセニズムですね—と同時に偶然からなっているということです。偶然（われわれはバルタザールの偶然を思い出します）……、それはおそらくこの映画の出発点にあったものです」（ブレッソン 2019 年 201-2 頁）と予定説にとらわれないと述べている。

2. ブレッソン作品と社会—作品に対する社会学的視点

ブレッソンの作品の特徴は、このように非商業主義志向（シネマトグラフ）とジャンセニズム—神学的および／あるいは一般的信条—の反映であると指摘されてきた。しかしそのテーマ性やドラマツルギーの地平に踏みとどまらず、映像に映された主人公の社会性—さまざまな登場人物や主人公をとり巻く社会との関係性—を通して、ブレッソン作品に描かれる個人と社会の特徴を析出し、現代社会の一端を考察することも可能である。

(1) 作品に対する社会学的視点—主人公の孤独

ブレッソン作品を見ると、主人公を含む二人以上の登場人物のショットや他の登場人物とのカット・バックのシーンの前後に、主人公のシングル・ショットが挿入される作品が多いことに気づく。このシングル・ショットでは、主人公が日記やメモを記し、独白（ナレーション）をする。この主人公のショットやシーンが形式化されるのは、『田舎司祭の日記』である。シュレイダーによれば、ジャン・セモリュエは、このシーンが主人公の隔離を表象するものと規定している（シュレイダー 123 頁）。すなわちシングル・ショットによる主人公の自己提示シーンは、映像における一人の存在、台詞における一人語りを用いた主人公の孤独の視覚化といえるものである。

ブレッソン自身、「孤独という主題は、無駄のそぎ落とし（デプイユマン）や冷たさを伴うものであって、ひどく不快で、おそらく耐えがたいものです」（ブレッソン 2019 年 103 頁）と語っているが、このシングル・ショットによる主人公の自己提示—孤独—は、ショット数の多寡に関係なくブレッソン作品の基本スタイルであり、またブレッソン作品の主人公の社会的特徴を示すシーンと見ることができる。本稿では、『田舎司祭の日記』以後の現代を扱ったブレッソンの作品の主人公の社会的特徴を孤独と見定め、映像を通して、孤独な主人公と主人公をとり巻く社会の解明をめざす。

(2) 個人と社会の関係性

孤独な主人公と社会との関係性を社会学的に解明するために、主人公をとり巻く社会のロケーション、主人公と社会の関係性（媒介の存在、社会の（不）安定性）、主人公をとり巻く社会的世界の 3 つに分析視点を設定したい。

① ロケーション—都市・農村

ブレッソンの作品の主人公は、表 2 のように、ロケーションによる属性の相違が見られる。そのため、主人公の孤独はロケーションの区分—農村と都市—を通して、社会的特徴が明白になると想定される[(2)]。

なお、ブレッソン自身の都市・農村の認識を紹介すれば、都会に関して「私にとってパリとは、幾つかの特権的な場所、なじみのあるお気に入りの場所

表 2　現代を扱った作品における主人公と主なロケーション

作品	主人公			主なロケーション
	名前	属性	自己提示	
罪の天使たち	アンヌ・マリー	富裕層の娘	院長等との会話	都市
ブローニュの森の貴婦人たち	エレーヌ	富裕層	復讐 会話	都市
	アニエス	貧困に転落 踊り子	手紙 会話	
田舎司祭の日記	若い司祭 （役職名で呼ばれる）	小教区主任司祭。神学校卒後、 初めての司牧地	日記 ナレーション	農村
抵抗	フォンティーヌ	レジスタンス （中尉） 監獄の囚人	ナレーション 壁の文字 囚人間のメモ	都市
スリ	ミシェル	一定の家庭出身で学歴を有する と推定。職業・生活に恵まれず	日記 ナレーション	都市
バルタザール どこへ行く	バルタザール	ロバ（愛玩→労働力）	鳴き声	農村
	マリー	校長の娘	非言語	
少女ムシェット	ムシェット	下層で家庭環境に恵まれない。成績不良	非言語	農村
たぶん悪魔が	シャルル	富裕層の出身。大学をドロップアウト	ミシェル等との会話	都市
ラルジャン	イヴォン	石油販売店の現業職	非言語	都市

からなっています。私はできる限り自分の経験を映画のなかに詰め込むようにしています」（ブレッソン 2019 年 302 頁）と述べ、都市に強い親和性が感じられる。一方で、農村に関して「私は長いこと田舎に住んでいました。しかし現代的な生活からあまりにかけ離れた『「田舎風映画』というものは信用していません。『少女ムシェット』で、大きなトラックの騒音を聞かせたのは、そういう理由からです。『バルタザールどこに行く』でも、できる限り自動車を登場させましたね」（ブレッソン 2019 年 302 頁）と語り、交通手段を通して都市とつながり、都市化が進む姿をイメージしている。

② 主人公と社会の媒介

ブレッソン作品の主人公は孤独ではあるものの、それでも周囲の社会と何らかの関係を保持している。こうした主人公と社会の関係において、両者を結節する人物や事物が登場する。本稿では、ルネ・ジラールにならって媒介と呼ぶことにする。ジラールは、フロベールやプルースト、スタンダール、ドストエフスキー等の近代的意識が内包される文学作品における情熱やスノビズムの分析から、主体と媒体、対象が欲望の三角形を形成すると主張し、媒体の役割に着目する（ジラール 1-28 頁）[(3)]。

本稿では、ジラールの分析にならって、主人公・媒介（者）・社会を設定し、孤独な主人公と社会との関係を、主人公と媒介者が信頼関係で結ばれ、媒介者の社会に対する対応や理解を主人公が受容し、社会に対応、理解する状況、つまり図 1 の 1 のように、ジラールが三角形と呼ぶ関係を想定する。加えて、主人公が社会に直接関与できない、しない状況（典型的には、収容所型施設）において、図 1 の 2 のように、媒介者が主人公の取次として社会に対応（代行）する直線的な関係も想定したい。

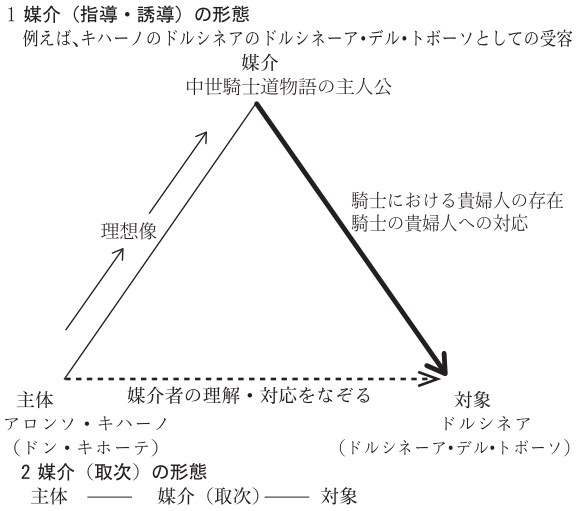

図 1　媒介の存在形態

③ 社会解体の危機

大半のブレッソンの作品は、表 1 のように、主人公の死で結末する。その原因は、主人公の側だけでなく社会の側にもあると疑われる。すなわち主人公と社会の間の不和の一因に、主人公をとり巻く社会

の脆弱性が想定されるからである。こうした主人公をとり巻く社会―とりわけ成員間の関係―に着目することで、社会の問題状況が明らかになろう。

④ 社会的世界―動物・信仰・暴力

さらに、ブレッソン作品の主人公をとり巻く社会的世界は独特で、信仰とともに暴力・犯罪、果ては動物等の生き物までも登場している。こうした社会的世界の構成物は印象的であるものの、あまりにも雑多で多様なため、社会学的な把握・理解を超える。本稿では、やむを得ず動物等を都市・農村という社会学的観点に結び付け、信仰と暴力・犯罪のシーンについては抽象化して観念的世界に関連づけて理解していく。

(3) ブレッソン作品の区分と分析

以上の視点を通して、ブレッソン作品の内容の分析を試みていく。なお本稿では、『田舎司祭の日記』以後の作品の中で、現代の農村と都市をロケーションにする作品のうち入手できた6作を分析の対象にしている。

次節で、農村をロケーションにした作品、第4節で、都市をロケーションにした作品について、主人公の社会的孤立と社会関係、社会的世界について明らかにする。最後の第5節で、ブレッソン作品における個人と社会について考察していく。

3. 農村をロケーションにした映画

フランスの農村をロケーションにした作品として、『田舎司祭の日記』『バルタザールどこへ行く』『少女ムシェット』をとり上げ、主人公の社会関係や社会的世界を整理したい。

(1) 田舎司祭の日記

本作のロケーションは、フランス北部の寒村（小教区）である。冒頭が日記のシーンで、次のシーンで若い司祭が自転車を降りて汗を拭き、大地主（領主）の邸宅の広い庭を眺める姿が映る。若い司祭は神学校卒業の直後で、この地が最初の赴任地である。司祭館には小農と思しき老人が押しかけ、妻の葬儀代が高いと食って掛かかる。家族関係が揺らぐ大地主家族やこうした村人（信徒）になじめない若い司祭の頼りは、近くの都市トルシーの小教区を担当する老司祭である。この村は鉄道で専門の医院やカフェのある地方都市と結ばれ、そこで神学校の同期生が女性と暮らしている。

資料表1の主人公の項目のように、若い司祭は全シーンに登場する視点人物である。そのうち主人公のシングル・ショットのみのシーンは、No.1の日記や手のシーンを含めて8シーンで、日記を綴るのが4シーン（No.1・No.18・No.32・No.41）、祈り等の信仰が2シーン（No.15・No.21）、手紙関係が2シーン（No.16・No.25）である。

それ以外のシーンでは、若い司祭と一緒に他の人物が登場する。最も登場が多いのが領主の家族で、シーンの数は領主の娘（以後、娘A）7、領主6、妻3、家庭教師3、甥1である。さらに近隣の小教区を担当するトルシーの司祭5、公教要理を受講する娘（以後、娘B）3、神学校時代の友人2、司祭館の職員2シーンである。

領主家族では、領主がNo.2で娘Aの家庭教師と抱擁する姿が、若い司祭に目撃される。当初、領主はNo.9・No.10のように、若い司祭の子どものためのスポーツ施設づくりに賛同するものの、No.28では若い司祭を無視するようになり、No.31で司祭失格と批判する。家庭教師は、領主と関係をつづける一方で、No.8の平日のミサに与る。娘AはNo.9・No.11で両親等と一緒に若い司祭に会う関係から、No.17・No.22は若い司祭と一対一で会うようになり、手紙を渡し詰問を始め、No.38では一人で司祭館を訪問し、若い司祭の荷造りを手伝う。領主の妻は、No.11で居留守を使う夫の代わりに若い司祭に会う。亡くなった男の子の話をし、No.26ではその子の死を天罰と受けとめていると若い司祭に語る。領主の甥はNo.39に登場して若い司祭をオートバイに乗せ、駅に送る途中、若い司祭も若者の一人であると話し、気持ちを軽くさせる。

トルシーの司祭はNo.4に登場し、赴任早々の若い司祭に信徒には権威的に振る舞うべきと助言し、No.14では信徒との関係を保つように助言する。No20の医師の葬儀ミサ後、動揺する若い司祭に医師の自殺説を否定する。No.33・No.34になると、領主の妻の死に対する若い司祭の対応や生活状況の改善を助言しつつも、突き放した対応に変わる。若い司祭は飲酒をとがめられるが、もはや助言に従わなくなる。

娘Bは堅信の公教要理の受講者で、No.7・No13のように他の受講の子どもたちと一緒に若い司祭をからかい、悪戯を繰り返す。しかしNo.36では病気に苦しむ若い司祭を介抱し、帰り道でその手をそっと握る。医師に若い司祭が会うシーンはNo.12のみである。しかし二人の会話から共通性が確認され、若い司祭は医師の話を告解ととらえる。教会の職員は、No.19・No.27で医師の死や領主の妻の手紙を若い司祭に伝える。

これらの登場人物のうち若い司祭と社会を媒介するのは、トルシーの司祭と後述の神学校時代の友人、医師、領主の甥である。しかし若い司祭はトルシーの司祭から見放されたと感じるようになる。医師は1シーンの登場ではあるが、若い司祭の宗教世界に影響を及ぼし、領主の甥は最後近くに登場し、世俗の楽しさを伝える。

動物等の登場は、馬が最多で6シーンである。多くが馬車を引く移動手段で、自動車とともに映されて時代遅れを象徴する。また本作の主人公が司祭であるため、多くのシーンに信仰が関係している。しかし村の信徒との関係や施設の立ち上げといった教会の組織運営に関わるものが多い。教会の平日ミサや葬儀ミサ後の時間、子どもたちへの公教要理も映され、教会外でもNo.11・No.12・No.26・No.27のように信徒（領主の妻）との問答のシーンがある。一方、信徒と神の媒介者といえる司祭自身の信仰に関して、No.15・No.28の祈りとともにNo.18の神に見捨てられた思い、No.21の信仰の保持の望み、No.32の神との距離等、信仰の揺れが描かれ、ついにNo.40では訪問先の教会で祈れなくなる。しかし死を前にNo.41・No.42で友人に告解をし、死を神の思し召しと受け入れる。

(2) バルタザールどこへ行く

本作のロケーションはフランス南西部の村である。都市に住む農園主が、毎年夏、3人の子どもと自動車で来村する。その隣家に住むマリーは校長夫婦の娘で、夏を農園主の子どもと過ごす。子どもたちは、子ロバを気に入り、洗礼を授けてバルタザールと名づける[(4)]。

しかし、農園主の子の一人の死を契機に来村が途絶え、バルタザールは荒んだ飼い主の間を転々する。一方、中流家庭に育つマリーも不良一味のリーダーでパンの配達夫の下層青年（ジェラルド）に見込まれ、その一味に転落する。マリーの父親に対する村人の讒言のため家族が財産を失う中、マリーは農園主の子どものジャックと再会し立ち直りを図るものの、不良の一味に辱められ出奔する。一方、バルタザールはジェラルド一味の密輸に利用され、警備隊に国境近くで銃殺される。

資料表2のように、本作の主人公といえるのが、バルタザールとマリーである。バルタザールとマリーが一緒に登場するのは20シーンに及ぶ。No.1～No.4では、バルタザールは愛玩動物として子どもたちと登場している。No.7のバルタザールとマリーの再会後、No.9でマリーが愛玩する様子をジェラルドがのぞき見し、バルタザールに嫉妬する。しかしNo.10のミサ後の教会の前で馬車や自動車と並ぶ光景やNo.11の公証役場の前で父を待つシーンのように、しだいにバルタザールは移動手段の様相を呈し、ついにNo.13で自動車に乗り換えるマリーの家族から放逐される。当初はNo.15のように、マリーはバルタザールに心を寄せるものの、No.16ではマリーはバルタザールと別のショットで映されるようになり、No.21・No.22・No.30ではマリーはバルタザールにまったく関心を向けなくなる。その一方でNo.42では、絶望の淵にいるマリーの母親が、バルタザールを聖なるロバと呼ぶようになる。

マリーがバルタザール以外の人物と映るのは、4シーンである。No.4の農園主の子どもとの別れ、No.13のバルタザールを手放すシーン、No.18の納屋でのジェラルドとの密会、No.39でジェラルドの一味に辱められるシーンである。一方、バルタザールがマリー以外の人や動物と映るのは16シーンに及ぶ。No.5・No.6では輸送業者の下での労働のつらさのあまり、逃げ出している。No.14ではパン屋に買い取られ、ジェラルドからひどい虐待を受ける。No.23で殺処分寸前のバルタザールはパン屋から性格破綻者のアルノルドに引き取られ、その後のNo.26で虐待を受け、No.27で裁判所前の道を自動車の間を縫うように逃走する。No.28ではサーカス小屋に紛れ込み芸を覚えて花形になるものの、見物に来たアルノルドに見つかる。No.31で遺産相続を喜びどんちゃん騒ぎをしたアルノルドがバルタザールから転落死し、バルタザールは家畜市場で吝嗇な穀物商に買い取られ、No.33・34では鞭に打たれて

脱穀作業に従事する。No.36 でマリーと関係を持った穀物商から両親に返されるものの、バルタザールは No.43 ～ No.45 でジェラルドに密輸の輸送手段に使われ、国境近くで警備隊に射殺される。

マリーとバルタザールが登場しないのは 5 シーンである。ジェラルドの No.17 のパン屋の売上金の使い込みと No.19 の殺人に関する警察の出頭命令、No.20 のジェラルドの一味とアルノルドの警察での聴取、No.25 のアルノルドの禁酒の祈り、No.32 の家畜市の競売のシーンである。

主人公と社会をつなぐ媒介者は、マリーの場合、かつての両親や農園主家族から不良のジェラルドに転じ、さらに再会した農園主の子ども（ジャック）も含めることができる。一方、バルタザールの場合、マリーを含むさまざまな飼い主が人間社会と結びつけている。

本作の中で文字が登場するのは 2 シーンである。No.11 の公証役場での農園主の手紙、No.32 の役所でのアルノルドの死亡届である。動物等の登場は、バルタザールが大半のシーンに登場し、他に No.10 のミサ後の教会前で馬車を引く馬、No.21 のアルノルドの庭の鶏、No.24・No.26 のアルノルドのもう 1 匹のロバ、No.28 のサーカスの虎や猿、象、No.33 の穀物商の作業場の牛と山羊、No.45 のバルタザールが射殺される国境の牧草地の羊の大群と犬である。

信仰に関するシーンは、No.2 に農園主の子どもとマリーのロバへの洗礼、No.10 の教会のミサで聖歌隊のジェラルドの独唱、No.14 の司祭からパン屋へのジェラルドの就職依頼、No.25 のアルノルドのベッドでの禁酒の祈り、No.40 の司祭のマリーの父親への病者の塗油、No.41 の母の祈り、No.42 の葬列のためのジェラルドによるバルタザールの連れ出し等である。一方、暴力・犯罪に関しては、労働力となったバルタザールに対して、輸送業者やジェラルド、アルノルド、穀物商が虐待や鞭で労働を強要する場面が 10 シーン程度である。またジェラルドとその一味による人間への嫌がらせや暴行は、マリーに対して 4 シーン、アルノルドに対して 2 シーンで、他にジェラルドのパン屋での使い込みと警察の殺人事件の取り調べの各 1 シーンである。

(3) 少女ムシェット

本作は、南フランスの村をロケーションとし、冒頭のシーンは、主人公ムシェットの病気の母親が教会で祈る姿である。それに続くシーンで、貧困の上に愛情に欠けた不幸な家族状況が映される。ムシェットは学校の教員から反感を買い叱責される一方で、同級生に嫌がらせをする性格である。子どもながらにカフェで働き、大人の世界に接するものの、父親から給金をとり上げられ、母親に代わって家事を担っている。

ムシェットは移動遊園地で大人の男と遊び、父親に叱られ、学校の帰りに入り込んだ森で密猟者のアルセーヌに出会う。密猟者の部屋について行き、大人のように酒を飲まされ暴行される。しかし打ち明けて相談したい母親からは、いつも通りに乳児のミルクづくりとおむつ替えを頼まれ、翌朝、ミルクを買いに行ったカフェの店員にふしだらと蔑まれ、ムシェットは反抗的になる。森番夫婦や優しく接する老女に反抗し、ついに森に入って自殺を遂げる。

資料表 3 のように、アヴァン・タイトルの No.1 の母親と No.2 の森番と密猟者、No.4 のカフェの店員のシーンをのぞくシーンで、主人公のムシェットが登場する。しかしシングル・ショットのみのシーンはなく、いつもムシェットは誰かと一緒に登場する。

ムシェットが人と一緒に登場するシーンは、定職につかず家庭不和の原因である父 7（うち 1 は声のみ）、次いで病気の母親 5、森番 5、カフェの店員 4、学校の子どもたち 4、密猟者 3 で、他に教師、乳児、父親の仲間やカフェの客、森番の妻、老女、トラクターの農夫等である。ムシェットの父親は No.5 で夜間、酔って帰宅し、No.10 ～ No.12 でムシェットをカフェで働かせて金を巻き上げ、ミサに与るよう教会入口に突き飛ばし、移動遊園地で男と親しく遊ぶムシェットの頬を張る。No.20 ではムシェットの反抗的な目つきをとがめる。また森番は、密猟とカフェの店員をめぐるさや当てから密猟者を憎悪し、No.10 ～ No.12 ではムシェットの前でカフェの店員に言い寄る。No.15 でムシェットは森番と密猟者が喧嘩をし、森番が殺害される様子を目撃するものの、No.22・No.23 でムシェットが覗く家から森番が現れ妻とともに、密猟者が何をしたのか詰問する。カフェの店員は No.10 ～ No.12 でムシェットの前で

表3　農村における主人公の社会関係

作品名 全シーン数	主人公		主人公とともに登場する主な人物					
	主人公	シーン数	登場人物	シーン数	媒介者	登場人物	シーン数	媒介者
田舎司祭の日記 42シーン	若い司祭	41 ＊シングル・ショット8	領主の娘（娘A）	7		トルシーの司祭	5	○
			領主	6		公教要理の娘（娘B）	3	
			領主の妻	3		司祭館の職員	2	○
			領主の家庭教師	3		神学校時代の友人	2	○
			領主の甥	1		医師	1	○
バルタザール どこに行く 45シーン	マリー＋バルタザール	20 ＊シングル・ショット0	ジェラルド	11		農園主の子ども	4	
			マリーの父	6		アルノルド	2	
			マリーの母	5		穀物商	1	
	マリー	4 ＊0	農園主の子ども	1	○	マリーの母	1	○
			マリーの父	2	○	ジェラルド	2	○
	バルタザール	16 ＊シングル・ショット1	輸送業者	2	○	マリーの父	2	○
			パン店	2	○	マリーの母	1	○
			ジェラルド	6	○	サーカス団員	1	○
			アルノルド	7	○	穀物商	3	○
少女ムシェット 26シーン	ムシェット	23 ＊シングル・ショット0	父親	7	○	カフェの店員	4	○
			森番（1回は妻も）	6		密猟者	4	
			母親	5	○	老女	1	
			学校の子どもたち	5		男	1	

注：シーン数は＊のシングル・ショットを含むシーン数で、筆者独自の推計である。
　　なおシングル・ショットは、主人公一人のものに限定し、筆者独自の推計である。

森番をあしらい、密猟者と移動遊園地で遊び、No.21で暴行を受けたムシェットをふしだらと詰る。病気の母親は、No.5・No.13で自宅のベッドで横たわってムシェットの介護を受け家事や育児を任せている。しかしNo.18ではムシェットの様子と思いに気づかず、No.19で自分はバカだった、悪い男に騙されたと言いながら亡くなる。学校の子どもたちが登場するシーンは、No.6～No.8・No.14で登下校と授業である。密猟者は、森番と一緒に登場した後、No.16・No.17でムシェットに一対一で会い、自宅に連れ帰って飲酒させ、暴行する。

これらの登場人物のうちムシェットと社会をつなぐ媒介者は、両親とカフェの店員である。母親はムシェットを家族生活、父親は労働力として大人の世界、カフェの店員は大人の恋愛に結びつける。

文字が映るシーンは、No.7の教室の教員の背の黒板の小さな文字のみである。動物等の登場はNo.2の密猟者の罠にかかった鳥、No.25の猟犬と追われるウサギである。信仰に関するシーンは、No.1の教会での母の祈り、No.11・No.12の教会とミサ後の光景である。暴力・犯罪等に関しては、No.7で教師がムシェットに体罰を加え、一方、No.8・No.14でムシェットが下校時に子どもたちに嫌がらせをし、ムシェットも男子生徒から悪戯をされる。父親はNo.11でムシェットから金を巻き上げて突き飛ばし、密猟者はNo.2で密猟をし、No.15で森番を暴行し、No.17でムシェットを暴行する。No.25でウサギが犬に追いかけられ銃で撃たれ、No.26ではムシェットが自殺する。またNo.21・No.23でカフェの店員と森番夫婦がムシェットを言葉で追い込んでいる。

以上、農村をロケーションにした作品の主人公と他の登場人物との関係、すなわち社会関係および社会的世界を概略した。表3の主人公の社会関係の整理のように、『田舎司祭の日記』では、若い司祭がほぼすべてのシーンに登場し、日記や祈りのシングル・ショットが登場シーンの2割に及ぶ。その一方、農村（小教区）社会の状況は激高する小農の老人以外は、領主（地主）の家族関係が3分の1を占め、領主・妻・娘Aと家庭教師の複雑な関係性が村の社会として描かれている。さらに娘Aと娘Bが若い司祭に異性として興味をいだき、近づいている。

若い司祭とこうした村人を媒介するのが、表4の

表４　農村における主人公・主な媒介者・社会

作品	主な媒介者	関係	属性・特徴	媒介の形態	媒介の状況
田舎司祭の日記	トルシーの司祭	隣りの小教区の司祭	隣りの小教区主任司祭・ベテラン	指導・誘導	村人（信徒）には権威的に接することを助言し、若い司祭は助言に従い領主の妻と問答をする。娘Ａを悪魔と呼ぶ。若い司祭を突き放し、若い司祭は従わなくなる。
	村人		司祭館の職員	取次	村人の状況を司祭に伝える存在。村人との交流の少なさが浮かび上がる。
	医師		村の知識層	指導・誘導	信仰の告白のつもりで信仰への懐疑を聞く。その後、信仰への懐疑が生まれる。
	領主の甥		外人部隊	指導・誘導	外国人部隊の司祭の話、司祭も若者の一人という話を聞き安堵する。
	神学校時代の友人		聖職を断念し、薬品関係の自営業	取次	若い司祭の最期を手紙でトルシーの司祭に伝える。
バルタザールどこへ行く	ジェラルド	マリーの恋人となる	下層で不良・犯罪	指導・誘導	両親や農園主家族からなる社会からマリーは下降し、ジェラルドの非行社会に染まっていく。マリーを暴行する。
	ジャック	農園主の子ども	都市から夏に来村	指導・誘導	ジャックの結婚の申し出に、マリーはやり直しを決意する。
	バルタザールの飼い主		さまざまな村人	取次	過酷な労働に従事させ、人間社会に結びつける。愛玩動物時代は媒介者の愛（家族愛）の対象とされ、労働力時代は媒介者が社会から受ける不満や屈辱のはけ口として虐待される。
少女ムシェット	母		病気で療養中	指導・誘導	病に伏し、家族愛を伝えられなくなる。夫との関係から男性に注意するようムシェットに助言する。
	父		子どもを働かせ搾取・犯罪的行為	指導・誘導	カフェで働かせて、ムシェットを大人の世界に接近させる。
	カフェの店員		若く、男性に人気	指導・誘導	男との交渉、あしらい。恋のさや当てを見せる。

ように、トルシーの司祭と司祭館の職員である。トルシーの司祭は、村人には権威的に対応するように助言し、若い司祭は領主の妻に毅然とした対応をする。また娘Aへの対応に悩む若い司祭に対して、トルシーの司祭は、娘は悪魔であると助言する。一方、司祭館の職員は村の状況の伝達や手紙等の取次にとどまることで、若い司祭と村人の距離を浮き彫りにする存在である。また若い司祭は無神論者の医師の回心を実感したものの、しだいに医師の無神論の影響を受け始め、祈りができなくなる。神学校時代の友人は、死を前に信仰を取り戻した若い司祭の思いをトルシーの司祭に手紙で伝えている。

『バルタザールどこへ行く』は、表3のように、バルタザールとマリーの二人が他の登場人物と映るシーンが半数弱である。マリーがバルタザール以外の人物と一緒に登場するシーンが1割弱にとどまるのに対して、バルタザールがマリー以外の人物と一緒のシーンは3分の1強に及ぶ。マリーをとり巻く村の社会は、家族および夏に来村する農園主の家族から、下層で不良のジェラルドの一味や生活破綻者のアルノルド等から構成されるものに変わる。主人公と社会との関係に関して、ジェラルドに見込まれたマリーは、表4のように、不良の一味の価値観と行動を受け入れていく。一方、マリーの家族が手離して愛玩動物の地位を失ったバルタザールをとり巻く人間社会とは、運輸業者・パン屋・穀物商という飼い主で、もはやバルタザールは労働力に他ならなくなる。

『少女ムシェット』ではムシェットが大半のシーンに登場するものの、表3のように、シングル・ショットのシーンはなく、半数が家族と一緒のシーンである。次に大人―森番・密猟者・カフェの店員・男等―と一緒のシーンが多い。一方、子どもの世界は学校のシーンが2割弱にとどまる上、敵対的な関係である。こうしたムシェットと村の社会をつなぐのは、表4のように、まず両親である。しかし病弱の母親は家族愛を伝える存在から失墜し、ムシェットを家事労働力として当てにし、死を前に男性不信を吐露して自分の人生を呪う。一方の父親は、ムシェットをカフェで働かせて金を巻き上げ、殴り、大人の世界を垣間見させる存在である。カフェの店員は大人の恋愛をムシェットの前で見せつけ、ムシェットもその行為をなぞるようになる。

4. 都市をロケーションにした映画

次に、都市をロケーションにした『スリ』『たぶん悪魔が』『ラルジャン』とり上げ、主人公の社会関係や社会的世界を整理したい。

(1) スリ

パリをロケーションにした本作では、主人公のミシェル等が住むアパート（アパルトマン）とともに、鉄道・地下鉄や駅構内、ホテルやカフェ、競馬場のシーンが多く、都市の雑踏と喧騒が映し出される。また夜のシーンも多く、光をたたえて夜の街を走るバスが都会をシンボライズする。この映像は、『白夜』『たぶん悪魔が』で光に満ちた船がセーヌ川を通り過ぎるシーンに受け継がれていく[5]。

ミシェルは安アパートの小部屋、病気の母親は別のアパートに暮らしている。ミシェルの出身・属性は語られないが、友人のジャックとの会話からパリに育ち、一定の学歴を有すると感じさせる。しかし失職のためか職に就いてなく、母の部屋で金を盗む。資料表4の主人公の項目のように、ミシェルは全シーンに登場する視点人物で、シングル・ショットのシーンが数多い。資料表4ではNo.1・No.35のシーンのみを掲載しているが、実は、作品に主人公が日記をつづるシーンは数多い。日記を綴るシーン以外のシングル・ショットは7シーンあり、大半がミシェルの自室か独房である[6]。一方、33のシーンではミシェルとともに他の人物が登場する。主な人物は、母親の隣室に住む若い女性ジャンヌ11、友人のジャック9、スリの対象者9以上、警部6、スリ仲間A 5、母親1である。

登場シーン数が最も多いジャンヌは、幼い妹ともに両親に捨てられた身の上にもかかわらず、隣室のミシェルの母親の世話をする。この縁から、ミシェルとその友人のジャックの交流が始まる。当初、No.5で母親に会おうとしないミシェルから金を預かり、No.12では母親の思いをミシェルに伝える。さらにNo14・No.15でミシェルに母親の危篤を知らせ、一緒に母親を見舞い、No.16・No.17で母親の葬儀ミサに出て、母親の荷物の整理を手伝う。ミシェルはジャンヌの信仰を見下し、No.32でジャンヌと別れる。数年後のNo.36で幼児を抱えるジャン

ヌに再会し、No.37で堅気になってジャンヌを支えようとする。しかし再びスリを働き、No.40の留置所に面会に来たジャンヌに無罪を勝ちとる算段を語るものの、ジャンヌの訪問が途絶えて絶望に陥る。No.42でミシェルは、ジャンヌを通して愛を知る。

ジャックはミシェルの友人で、ジャンヌや警部と交流がある。ジャックが一人でミシェルに会うのはNo.20・No.27・No.29で、ミシェルの部屋の内外である。スリ行為を議論し、ミシェルのスリの行為を諫め、ジャンヌに警察の召喚状が届いたことを告げる。一方、ミシェルは、ジャックに対してジャンヌへの恋慕を疑う。ジャックとジャンヌの二人がミシェルに会うのはNo.16・No.26で、葬儀ミサや遊園地である。またジャックが警部と一緒にミシェルに会うのは、No.6・No.9・No.21のいずれも夜のカフェで、三人で犯罪について議論を交している。

警部はNo.3でミシェルを取り調べ、その後、夜のカフェでジャックを通してミシェルに近づく。No.31ミシェルの部屋を訪問して、逮捕を予告する。スリ仲間Aは、No.12でミシェルのアパートの近くに現れ、No.13でスリの技術を伝授し、No.18で相棒になる。No.19で別の仲間を紹介し、No.18・No.19・No.28等で徒党を組むものの、No.30でミシェルの前で逮捕される。

これらの登場人物のうち主人公と社会を媒介するのは、ミシェルをジャンヌに会わせた母親、愛の世界にミシェルをつなごうとするジャンヌ、ミシェルの回心を求めるジャックと警部、スリの世界にミシェルを引き込むスリ仲間Aと見ることができる。

また、日記等に関して、No.1のシーンで、実行者（スリ）だが日記を記すと綴り、日記を社会階層に関係する行為のように語っている。No.18・No.28・No.35でスリを働く（働いた）ことを綴り、No.14・No.41ではジャンヌの手紙を読んでいる。動物等の登場はないものの、競馬（場）が出てくるシーンがあり、No.2・No.39で馬の鳴き声や新聞に掲載された競走馬の写真が登場する。信仰に関しては、No.16・No.17の葬儀ミサの後に死後の裁きについてジャンヌと問答をする。ミシェルはジャンヌの信仰を見下すが、No.42のナレーションではジャンヌを通して愛を知ったことが婉曲に語られる。犯罪に関して、この作品では犯罪（スリ行為）が多くのシーンで描かれ、登場人物の多くがスリの対象者（被害者）である。ミシェルのスリ行為は単独から徒党にエスカレートするが、No.11でスリの対象者に咎められたこともその契機の一つである。

（2）たぶん悪魔が

本作もパリがロケーションで、タイトル・バックは光に満ち夜のセーヌ川を航行する観光船である。アパートの生活、パリのセーヌ河畔、学生街、書店、ビル、環境保護協会、教会、警察が都市景観として映り、自動車や地下鉄、バスでの移動の後に周辺地の墓地や郊外の川原が現れる。なお本作には、公害や地球環境の映像が挿入されている。

主人公シャルルは地方出身の大学生で、No.37の精神科医のカウンセリングで「父が裕福になればなるほど、母は父を愛するようになった」（ブレッソン2019年354頁）と家庭環境を語る。左翼運動が下火になった1970年代後半、虚無的で浮遊状態に陥ったシャルルであるが、周りには環境問題に関心を抱く青年が集まる。その一人、友人のミシェルは環境問題の専門家で、シャルルの生活意欲と社会意識を呼び覚まそうとする。二人の女性、同棲する女性のアルベルトと行動を共にする女性のエドヴィージュは、死の誘惑からシャルルを守ろうとする一方で、それぞれの愛に導こうとする。ところがシャルルは、規範意識の低い青年のヴァランタンに惹かれていく。

資料表5の主人公の項目のように、シャルルのシングル・ショットはNo.38の手紙を書くシーンのみで、シャルルが登場するシーンはいずれも他の人物と一緒である。シーン数はミシェル22、アルベルト15、エドヴィージュ10、ヴァランタン8で、他には書店主や環境保護協会のスタッフ、大学生、路上の若者、精神分析医等である。

シャルルは多くのシーンでこれらの人物と一緒にいるものの、誰かと二人だけのシーンは少ない。二人で会っているのは、ミシェルとのNo.11・No.17・No.25、ヴァランタンとのNo.33・No.34、No.40～No.42等である。三人以上のシーンは、ミシェルと二人の女性との四人のシーンがNo.4・No.28・No.36・No.37、ミシェルとアルベルトとの三人のシーンがNo.9・No.12・No.20・No.22、ミシェルとエドヴィージュとの三人のシーンがNo.15、二人の女性との三人のシーンがNo.5である。しかしヴ

ァランタンとは、二人だけで会うシーンが増加していく。

こうした登場人物のうちシャルルと社会を媒介するのは、大学や社会につなぎ留めようとする存在として友人のミシェル、愛の世界に結ぼうとする二人の女性（アルベルトとエドヴィージュ）、シャルルの自殺志向にわれ知らず加勢するヴァランタンである。

なお、シャルルが登場しないシーンはNo.3・No.18～No.20、No.22・No.29である。これらの不在シーンの他にNo.9の自殺をほのめかすシャルルのノートとともにNo.1のシャルルの死亡記事がある。またNo.7・No.19の書店、No.34のユゴーの著作、No.35・No.37の社会批判的なチラシの映像等、本や文字が多く映されている。

動物等は、No.28のカドミウム汚染のため水泳禁止のパリ郊外の川で、魚が釣り上げられている。信仰に関しては、No.6で教会の改革派の若い司祭と若者の対話（対立）、No.34のシャルルがヴァランタンにユゴーの聖堂に関する文を読み聞かせ、教会に誘うシーンである。夜の教会のシーンでは、クラシック音楽をかけながら二人が泊まり込むものの、シャルルが寝入っている間にヴァランタンは献金泥棒を働く。

暴力や犯罪に関しては、シャルルがNo.21・No.23で路上の仲間から銃を盗み、試射し、No.39で銃を購入し、さらにNo.32・No.33の薬物販売者から薬物を購入してヴァランタンに投与している。またシャルルは、No.35のヴァランタンの献金泥棒に巻き込まれて警察に逮捕される。一方、ヴァランタンはNo.30の食料品店での万引き、No.33の薬物使用、No.34の教会の献金泥棒、No.42のシャルルの殺害と窃盗等、犯罪を繰り返す。他にNo.28の郊外の遊泳禁止の公園での警察の取り締まり、No.27のバス事故のシーンがある。

(3) ラルジャン

本作のロケーションもパリで、夜間のキャッシュ・ディスペンサーに自動車のライトが反射するタイトル・バックのシーンから始まる。まず中流家庭の家族が登場し、子どもが両親に小遣い（お金）をねだる様子が映され、その後、同級生宅で贋札を手にする。この贋札をカメラ店から代金として受けとった石油会社の現業社員の主人公（イヴォン）が、カフェで支払いをめぐりトラブルとなり、警察に逮捕される。

この事件で、妻子とアパートで暮らすイヴォンの日常生活は一変し、裁判所、カフェ、銀行という都市の諸施設、さらに刑務所が舞台として登場する。出所後、イヴォンは街をさ迷いながら、宿泊した安ホテルと郊外の中年女性の家で殺人事件を起こす。

イヴォンは、資料表6の主人公の項目のように、No.4から登場するものの、クロス・カッティングとなるイヴォン不在の10数シーンが挿入されている。イヴォンのシングル・ショットはNo.5のタンクローリーから降りて石油会社の事務所に向かうシーンのみで、他のシーンは誰かが登場している。妻（子）6、中年女性6・その父4・その甥3・その姉妹1、カメラ店の（元）店員4・店主2、弁護士2、同房者B 2のシーン数で、他に友人のカフェ経営者、警官、刑務官、裁判官、受刑者、同房者A、ホテル経営者夫妻、郵便局員等が登場する。

妻はNo.8で驚き悲しむが、イヴォンの災難を受けとめて、弁護士への相談を勧め、No.9で和解を勧める。さらにNo.12では解雇の取り消しを会社に頼むようにイヴォンに求め、No.19では、逮捕された夫を一人警察で待つ。しかしNo.20の夫の裁判の傍聴後のNo.23の面会のシーンでは、面会よりも移動の映像が長く、その後、No.25・No.28の郵便担当の刑務官のシーンでは、妻の子どもの病死を伝える手紙の後、別れの手紙が保留され、その後、連絡が途絶える。

中年女性は、No.37の郵便局で金を引き出す姿をイヴォンに見られ、強盗の対象になる。しかしNo.38で女性の家に入り込んだイヴォンに女性は神の許しを与え、一方イヴォンは、女性が家族の犠牲になっている様子に同情を寄せる。しかしNo.39～No.43では女性宅を物色し、No.44で女性宅の各室を回って一人ずつ殺害する。また1シーンの登場ながら、友人のカフェ経営者はイヴォンを銀行強盗に誘い、イヴォンは逮捕され刑務所に収監される。

本作では、イヴォンが登場しないシーンも多い。冒頭のNo.1～No.3は、贋札を行使する少年と受け取った贋札をイヴォンへの支払いに使うカメラ店のシーンである。No.14・No.15の学校とカメラ店のシーンには、少年とその母親が登場する。カメ

表5　都市における主人公の社会関係

作品名 全シーン数	主人公		主人公とともに登場する主な人物					
	主人公	シーン数	登場人物	シーン数	媒介者	登場人物	シーン数	媒介者
スリ 42	ミシェル	42 ＊シングル・ショット14＋α	ジャンヌ	11	○	警部	6	○
			ジャック	9	○	スリ仲間A	5	○
			母親	1	○	スリの対象者	9＋α	
たぶん悪魔が 42	シャルル	37 ＊1	ミシェル	22	○	エドヴィージュ	10	○
			アルベルト	15	○	ヴァランタン	8	○
ラルジャン 45	イヴォン	30 ＊シングル・ショット1	妻（＋子）	6	○	カメラ店主	2	
			中年女性	6	○	弁護士	2	
			その父	4		同房者B	2	
			その甥	3		友人のカフェ経営者	1	○
			カメラ店の店員	4				

注：シーン数は＊のシングル・ショットを含むシーン数で、筆者独自の推計である。
　　なおシングル・ショットは主人公一人のものに限定し、筆者独自の推計である。

ラ店の店主と店員等のシーン（No.13・No.22・No.26）があり、No.22でカメラ店を解雇された店員は、その後、仲間と徒党を組みカメラ店の金庫荒らしやNo.24のキャッシュ・ディスペンサー荒らしに手を染める。No.31の裁判で犯罪の社会的正当性を主張するものの、No.32で自殺未遂のイヴォンの刑務所への帰還と同時に収監され、No.34で聖堂のミサで再会したイヴォンに脱獄をもちかける。

こうした登場人物の中で主人公のイヴォンと社会を媒介するのが、妻と中年女性、友人のカフェ経営者である。当初、妻はイヴォンの災難を受けとめ、イヴォンの立ち直りを支えようとする。中年女性はイヴォンに神の許しを与え、イヴォンを自分の家庭に受け入れる。一方、友人のカフェ経営者はイヴォンを犯罪に巻き込む。

文字が映るシーンは多くない。No.25で妻からイヴォンに宛てた手紙を同房者2人がからかい口調で読み上げるシーン、No.28・No.30の妻からの手紙、No.36の出所票である。動物等の登場は、No.37の中年女性が住むパリ郊外をパトロールする警官が連れた警察犬、No.38・No.40・No.44の女性の家で飼っている犬である。イヴォンによる家族の殺害では、この犬の鳴き声が悲しく響く。

また、No.2～No.6で贋札が登場、流通する。イヴォンが受難し、偽証のカメラ店の（元）店員も金の魔力に取りつかれる。一方、贋札行使の中流家庭の子どもは親の経済力、金の力に守られて罪から逃れている。信仰に関しては、No.15の私立学校で宗教教育担当の司祭が生徒の犯行を問いただし、No.34の聖堂のミサで脱獄の相談が行なわれ、No.38では、中年女性が神の許しをイヴォンに与えている。

以上、都市をロケーションにした作品の主人公と他の登場人物との関係、すなわち社会関係および社会的世界を概略した。表5の主人公の社会関係の整理のように、『スリ』では、主人公のミシェルがすべてのシーンに登場し、多くの日記や手紙のシングル・ショット、さらにスリの練習風景が3分の1を占める。表6のように、アパートに暮らしスリで生活するミシェルをとり巻く社会は、友人のジャックおよび一人暮らしの母を通して知り合ったジャンヌが主で5分の2のシーンに登場する。母親を通して知り合ったジャンヌがミシェルを信仰や家族愛に向かわせようとし、ジャックと警部がミシェルに堅気の社会（観）に引き戻そうとする。一方、犯罪に関して、警察（警部）や刑務官、スリ仲間、スリの対象者が半数以上のシーンに登場し、スリ仲間がスリの技法を見せつけてミシェルを誘う。

『たぶん悪魔が』は、表5のように、主人公のシャルル登場が大半のシーンであるものの、シングル・ショットは1シーンのみである。しかし環境問題の映像や書店、討論、本の読み聞かせのシーンによって、シャルルをとり巻く社会の一端が現われている。

虚無的で、友人の間を浮遊するシーンが4分の3に及び、シャルルの心象と状況が浮かび上がる。シャルルにとって社会はしだいに友人関係に限定さ

表 6　都市における主人公・主な媒介者・社会

作品	主な媒介者	関係	属性・特徴	媒介の形態	媒介の状況
スリ	母親		一人暮らし、病気	取次	母親を通して世話をするジャンヌを知る。
	ジャンヌ	母親の隣室	両親に捨てられる	指導・誘導	隣室に住むミシェルの母親を世話し、ミシェルに愛の世界、信仰の世界を伝える。
	ジャック	友人	ミシェルと同じ経歴	指導・誘導	ミシェルにスリをやめ職に就くように助言する。ジャンヌをめぐりミシェルと三角関係。乳児のいるジャンヌを捨てる。
	警部		警察官	指導・誘導	一人の人間として、ミシェルの価値観を変え、堅気の世界に戻るように助言する。
	スリ仲間A		犯罪者（スリ）	指導・誘導	ミシェルをスリの世界に招く。技術を伝授し、仲間を紹介して徒党を組む。
たぶん悪魔が	ミシェル	友人	環境問題専門家	指導・誘導	シャルルに生活意欲と社会意識を取り戻し、大学を含めた社会にとどまるように助言する。アルベルトをめぐりシャルルと三角関係。
	アルベルトとエドヴィージュ	恋人	良家の子女	指導・誘導	虚無的なシャルルを自殺の誘惑から守り、愛の世界に導こうとする。
	ヴァランタン	友人	青年で規範意識低い	指導・誘導	反社会的・刹那的な生き方をつづけ、シャルルの自殺をわれ知らず後押しする。
ラルジャン	妻		子育てに従事	指導・誘導	イヴォンと家族愛に満ちた生活を送ろうとし、上手く状況を対処するように助言する。しかし、夫の収監中に去る。
	友人		カフェ経営者	指導・誘導	金を借りに来たイヴォンを銀行強盗に引き入れる。
	中年女性		家事を担当	指導・誘導	イヴォンを家庭に受け入れ、罪の許しを語る。しかし家族とともに惨殺される。

れ、表6のように、環境問題の専門家のミシェルがシャルルに生きる意欲と社会意識を呼び起こそうとし、アルベルトとエドヴィージュの二人の女性が、シャルルをめぐる協調と競合を通して愛の世界に導こうとする。一方シャルルは、刹那的で規範意識に乏しいヴァランタンに惹かれていく。

『ラルジャン』では、表5のように、主人公のイヴォンの登場シーンが3分の2を占めるものの、イヴォンと同様に犯罪に手を染めるカメラ店の（元）店員、贋札を最初に行使した高校生の三様の状況が描かれる。

イヴォンのシングル・ショットは1シーンのみで、職場への移動である。他の人物が一緒に登場するのは、妻（+子）および中年女性とその家族が全シーンの4分の1で、イヴォンの転落の契機となるカメラ店の店主・（元）店員のシーンもほぼ同数である。

表6のように、仕事と子どもを失い妻が去り、家族を主としたイヴォンの社会は崩壊し、虚無的なままに出所したイヴォンを支えようとするのが、強盗の標的とされた中年女性である。一方、友人のカフェ経営者は1シーンの登場ながら、イヴォンを犯罪の世界に引き込んでいる。

5. ブレッソン作品における個人と社会

以上、農村と都市をロケーションとしたブレッソンの作品の主人公の状況と社会との関係、さらに社会的世界の一端を明らかにした。最後に、孤立した個人をとり巻く社会を地域性から、個人の孤立状況や社会との関係性を媒介者および関係の脆弱性の観点から、そして社会的世界の一端を信仰の形態と社会観から、考察していきたい。

(1) 地域性

まず、作品のロケーションが、個人を取り巻く社会に及ぼす影響について明らかにしたい。

① 主人公をとり巻く社会—農村の社会構造と都市の社会関係

ブレッソンが「私が常に心掛けているのは、本質的でない事柄はすべてばっさりと削除することです」（ブレッソン229頁）と語るように、彼の作品に顕現する社会とは、主人公にとって「意味ある他者」に限定された理念型である。すなわち主人公をとり巻く社会とは典型化され、とりわけロケーションによって類型化されたものである。

農村の場合、主人公をとり巻く社会は、村の社会構造が大きく関与している。若い司祭にとって、それは大地主（領主）の家族に外ならず、他の村人は司祭館の職員を介する間接的な存在にすぎない。またドラスティックに転落したマリーにとって社会とは、自分や農園主の家族から構成された中流層から、不良の若者一味やアルノルドの下層の社会である。さらに下層の家庭に育ち家族が機能不全に陥っているムシェットにとって社会は、良からぬ大人が集まる村のカフェである。

一方、都市の場合、主人公をとり巻く社会は、主人公が触手を伸ばし形成する個人本位の社会関係で、複数の下位社会が共存・競合する。ミシェルにとっては、社会とはジャンヌとジャック（+警部）から形成される社会関係とスリ仲間を成員とする社会関係の共存・競合である。またシャルルにとって、社会とはミシェルと二人の女性、さらにヴァランタンによって形成される社会関係の共存・競合である。一方、イヴォンにとって、社会は家族の解体後には形成されることなく、泡沫の個人関係が消長するのみである。

② 都鄙間の勢力—労働馬と競走馬

また、農村の場合、運送や脱穀に従事する家畜は、後進性や保守性の象徴である。その一方、自動車が同じシーンに映り、都市との交流を象徴する。すなわち家畜が働く農村を走る自動車とは、若い司祭の都市（の神学校）からの赴任や農園主の家族の毎年の来村、バルタザールが紛れ込む巡業のサーカスやムシェットが大人と遊ぶ移動遊園地とあいまって、都市の優位性—富や教育・文化、新進性—を表象するものである。しかしマリーの家族が例外的にロバから自動車に乗り換えているものの、村には都市の攻勢を押し返す頑迷性や敵対性、暴力性が満ちあふれ、さまざまな逆襲が見られる。エマニュエル・トッドは、こうした都鄙の状況を二つのフランスと呼び、とりわけ農村の反逆をゾンビ・カトリシズムと名づけている（トッド、63-8・74-8頁）

都市の場合、セーヌ川が映るものの、その河岸は人工的である。街には動物の姿がなく、都市の馬は遊興施設（競馬場）かスポーツ新聞のギャンブル記事に押し込められる存在である。身近な自然として、

周縁地である郊外・近郊が登場する。しかし郊外は、公園の魚が公害に汚染された都市の悪い影響圏であり、イヴォンが迷い込んだ近郊の町の犬の無力さは都鄙の間の半端な状況を窺わせる。

(2) 孤独した個人と社会—社会の形成と崩壊

次に、ブレッソンの作品の主人公と社会の関係を考察したい。主人公は孤独であると同時に、社会の一員でもある。その関係性を媒介と解体という観点から考察したい。

① 孤独の諸相—日記と眼差し

ブレッソンの作品の主人公の社会的特徴である孤独は、第3節・第4節でふれた典型的な日記等のシーンに加えて本（棚）や書店のシーンにも顕現し、これらのシーンから孤独な主人公の社会的属性が推測できる。すなわち若い司祭やミシェル、シャルルが一定の教育水準や社会的背景を有することが推測されるものの、しかしその知識や経歴は無用とされる状況にある。農村では、若い司祭は村の社会（大地主）から否定され、都市では、ミシェルが就職できず、シャルルは学識を自ら拒否する。とりわけ農村の場合、構造型の社会的特徴に加えて都鄙格差に由来する社会属性の差異と敵対性のため、主人公が社会的孤立に陥るシーンが多く描かれている。

しかし、ブレッソンの作品には、もう一人の孤独な主人公が存在する。農村の少女のマリーやムシェット、都市の石油会社で働いていたイヴォンで、行政書類や手紙、わずかな文字しか映らない黒板が、若い司祭たちと異なる属性を推測させる。彼らの孤独は、シングル・ショット以上に、複数の人物が登場するショットやカット・バックに顕現されるものである。すなわち未成年や低い地位にあり、社会に圧倒される彼らの状況を表出するのが、他の登場人物に向けた主人公の眼差し—社会に向ける悲しい眼差し、冷たい眼差し、怒りの眼差し—である。

マリー、ムシェット・イヴォンがいだく孤独感—社会との隔たり—は、不本意にも本来の社会的位置を剥奪され、異なる世界に移相された被害者のもつ孤独である。被害者である農村の子ども（マリーとムシェット）は、しかし非行文化や大人の社会に巻き込まれ、いつの間にかその価値観と行動様式に身を置くようになり、都市に暮らすイヴォンは犯罪に誘われ、犯罪文化に染まっていく。

② 社会との媒介

ブレッソンの作品には、こうした孤独な主人公を社会に結節する媒介が存在する。この媒体のうち主人公の心象や行動に影響するものを指導者と呼ぶことにし、さらに指導者を新しい社会的世界（下位文化）への誘導者と現在（元の）の社会の保全者に区分してみたい。

新しい世界に主人公を導き、手ほどきする誘導者とは、若い司祭の場合、司祭と農村の信徒の望ましい関係を権威的関係と教えるベテランのトルシーの司祭であり、ミシェルの場合、愛の世界に導こうとするジャンヌであり、見事なスリの技術を見せつけて仲間に引き込むスリ仲間Aである。マリーの場合、性愛と不良の世界に沈める不良のジェラルドであり、ムシェットの場合、大人の恋愛遊戯を見せつけるカフェの店員である。またシャルルの場合、刹那的に生きるヴァランタンの姿であり、イヴォンの場合、犯罪に誘うカフェ経営の友人である。

その一方、主人公を現在（元）の社会につなぎとめようとする保全者も登場する。ミシェルの場合、友人のジャックと警部が健全な社会的世界に回帰させようとし、転落したマリーの場合、ジャックとの再会が、元の社会層への復帰と家族愛への希望をつなぐ。シャルルの場合、生活意欲と社会意識を呼び覚まそうとする友人のミシェル、シャルルの命を守ろうとする二人の女性—愛の世界への誘導者でもある—が存在する。しかし赴任早々の若い司祭の場合には保全者が不在で、司祭館の職員と神学校の同期生はともに取次者にすぎない。ムシェットの場合、家族愛の提供者であった母親は病気で伏し、イヴォンの場合、愛の世界である家族は解体し、中年女性が暮らす家族生活に魅力を見出せない。

なお、主人公と社会の取次者の登場は少ない。取次者の登場が多いのは、監獄・刑務所や修道院等の収容所施設のロケーションの作品で、農村と都市をロケーションにする作品では、主人公をとり巻く社会の意味なき他者（その他大勢）の存在を象徴するか、主人公と意味ある他者をつなぐ道具の役目である。

しかし、人間以外を取次者に加えてみれば、贋札やロバといった存在が、人間の社会の多層性を照射する重要性な媒体であることに気づく。贋札（金）は、社会を流通しながら、イヴォンをはじめとする

さまざまな人を結びつけ、さらに誘導的な役割を担うようになる。高校生の行使した贋札がカメラ店に渡り、代金として受け取ったイヴォンがカフェで逮捕され（高校生―カメラ店―イヴォン―カフェ）、イヴォンとカメラ店の店員が金にとり憑かれるようになる。また愛玩動物から労働力に転落したバルタザールも社会の中を流通し、さまざまな職の人間（輸送業者―パン屋（ジェラルド）―アルノルド―サーカス―穀物商）の間を流れ、流れる。そしてマリーの母親の手に戻ったバルタザールはいつの間にか誘導的役割を担い、絶望の淵にある母親が聖なるロバと呼ぶに至る。

③ 社会関係の危うさ―男性・女性

ブレッソンの作品の社会には複数の男女からなる関係が内在し、主人公の生活や社会の安定を脅かす崩壊の火種となっている。赴任早々の若い司祭が目撃する領主と娘Ａの家庭教師の抱擁（領主―家庭教師・（妻））を通して、不安定な家族状況（さらに領主―家庭教師・（娘Ａ））が顕現し、この家族状況に若い司祭が巻き込まれる。すなわち娘Ａは若い司祭と問答をする母親に嫉妬（若い司祭―娘Ａ・（母親））し、相談を受けたトルシーの司祭の助言―娘は悪魔―に若い司祭が反論したことが、トルシーの司祭に突き放される一因になり、さらに司祭職の危機につながる。娘Ａに加えて、公教要理受講の娘Ｂが若い司祭に関心を寄せ（若い司祭―娘Ａ・娘Ｂ）、若い司祭は教役の遂行が困難になる。

また、ミシェルは、ジャックのジャンヌへの恋慕を疑い（ミシェル・ジャック―ジャンヌ）、ミシェルの消えた後にジャンヌはジャックに捨てられる。ジェラルドは、マリーがバルタザールをかわいがる様子に嫉妬して暴行を働き（マリー―バルタザール・ジェラルド）、マリーの転落が始まる。ムシェットは、カフェの店員をめぐる森番と密猟者の争い（カフェの店員―森番・密猟者）の側杖を受けて暴行される。

その一方で、シャルルはミシェルにアルベルトへの恋慕を尋ね（シャルル・ミシェル―アルベルト）、アルベルトとエドヴィージュがシャルルをとり合う（シャルル―アルベルト・エドヴィージュ）ものの、4人の間には決定的な亀裂は生じない。しかし三人を三竦みの一体と見れば（シャルル―三人組・ヴァランタン）、三人が竦んでいる間にヴァランタンに接近したシャルルが自殺したといえる。

(3) 現代の社会的世界―信仰と警察の諸相

最後に、ブレッソンの作品の特徴である聖性と暴力・犯罪について考察したい。ソンタグは「ブレッソンの映画にはすべてに共通するテーマがある……。聖職と罪のイメージがともに結び合って用いられている」（ソンタグ 212-3 頁）と指摘するが、この対極的な世界の混在を社会学的な観点から理解したい。

① 信仰と教会―心象としての信仰と制度としての信仰

ソンタグの一般化に反して、ブレッソン作品における信仰と暴力・犯罪は、実は、性別でとらえれば、分かりやすいものである。すなわち信仰心―心象としての信仰―は、ブレッソン作品の検分から、明らかに女性の領分に含まれるためである。領主の妻やジャンヌ、マリーとムシェットの母親、中年女性は神を恐れ神に頼り、神を信じて日常の信仰に生きる人物である。いわば愛の世界に生き、心象としての信仰を男性に宣教する者であると同時に、子どもの死や病気、夫の浮気に苦しみ、男性の暴力や犯罪の被害者である。

一方、男性にとって信仰は、主日のミサや葬儀といった行事のシーンが大半で、制度的あるいは形式的な信仰と呼べるもので、典型的には、こうした信仰は暴力・犯罪性向と共存する傾向にある。暴力的で犯罪を厭わないジェラルドは、一方で、聖歌隊の独唱や司祭の手伝いをし、司祭から仕事の世話を受ける。またアルノルドは一人ベッドで夜の祈りの姿を見せるものの、自堕落な生活や動物虐待は止むことがない。ヴァランタンにとっては、教会は容易に金を盗むことができる犯罪の場であり、カメラ店の元店員にとって刑務所の聖堂のミサは、脱獄を相談する集会場である。またこうした男性は、女性の心象としての信仰を軽視・軽蔑している。ミシェルは、ジャンヌの信仰―死後の裁き―を蔑み、イヴォンは女性の神の許しを歯牙にもかけない。マリーの父でさえ、妻が病者の塗油を依頼した司祭に背を向けている。

男性の中には、心象としての信仰を求めたり、関わったりする者もいる。しかし不信や懐疑にさらされ、信仰に揺らぎが生じることになる。若い司祭の

場合、許しの秘蹟を医師に授けた満足感や領主の妻を神への帰依に導いた満足感が自己満足に過ぎないのではないかという疑念に代わり、自責の念に駆られる。またシャルルの信仰は、ヴァランタンの献金泥棒によって一蹴されている。

② 聖なる警察と劣化した警察

神の絶対性―心象としての信仰―を離れ、制度的、形式的な信仰に生きるブレッソン作品の男性を統治するのが、警察である。警察（司法・社会権力）は、神を恐れない男性に処罰、時には社会の許しを与える存在で、社会正義の世界を形成する。同時にブレッソンは、人格としての警察と劣化した警察の二面を描いている。警部は前者で、犯罪から足を洗うようミシェルに繰り返し説得する存在であり、外人部隊に所属する領主の甥は、同じ若者として司祭に安らぎを与えている。

しかし、もう一面の警察は、不良のジェラルドや性格破綻者のアルノルドの取り調べに失敗する機関で、二人は暴力や虐待、犯罪を繰り返す。森番と密猟者、そしてムシェットの父は警察を警戒しているものの、その犯罪を警察は抑止できない。さらにシャルルを献金泥棒と誤審し、贋札に巻き込まれたイヴォンを検挙し、贋札行使の高校生を見逃す機関である。

ブレッソンは自らの作品をシネマトグラフと称し、1950年代以降、このスタイルを一貫し、商業映画（シネマ）と距離を保ってきた。そしてジャンセニズムと呼ばれるほどに厳格な映像によって、現代社会、とりわけキリスト教社会の雑多で多面的な状況を作品に映し出し、結果として、世界的に非常に高い評価を得ている。

本稿では、現代社会―農村と都市―に生きるブレッソン作品の登場人物の社会関係に焦点を当て、作品の分析を通して、現代人の孤独の状況、個人と社会の関係性、社会関係の形成、社会関係の崩壊の危機、さらにとり巻く社会的世界の内実を探った。

私たちにとって、ブレッソン作品は現代社会を身近（ミクロ）に理解するための日記と眼差しの役割を担っている。すなわち田舎司祭とイヴォンの孤独は、私たちと社会の関係を再考させる契機であり、マリーやミッシェルが生きる農村や都市の社会は、身近な社会を理解するために構造型と関係型の二類型を提供する。またトルシーの司祭やジャンヌ、司祭館の職員の働きは、身近な人が果たす多様な役割を私たちが認識する一助となり、ヴァランタンという陥穽は、アルベルトとエドヴィージュ、そしてミシェルからなる小集団の脆弱性を認識する契機である。さらに中年女性や警部の空しい努力は、私たちが生きる現代社会の主要な価値のいくつか―愛の世界や正義の世界―の共存や相克を認識する手がかりになるものである。

注

(1) パリ外国宣教会の司牧地であった日本にもこの影響が及び、長崎の信者の信仰と生活に影響を及ぼしたといわれる（クリスチャン128頁）。

(2) ブレッソン作品に特有のロケーションは、「監獄」等の収容所型施設である。表1の収容所等の生活のように、『抵抗』『スリ』『ジャンヌ・ダルク裁判』『ラルジャン』の主なロケーションは監獄や刑務所である。また『罪の天使たち』の女子修道院、『田舎司祭の日記』の司祭館は、住民の訪問や交流が少ない施設である。ブレッソンへのインタビュアーの一人、イヴ・コヴァックスが「あなたの映画では、ほとんどつねに監獄のテーマが見られるのはなぜでしょうか？」と質問し、ブレッソンは「それは気づいていませんでした。おそらくわれわれの誰も囚人であるからです」（ブレッソン2019年136頁）と存在論の観点で回答し、私たちの日常生活が見えない壁で囲まれている状況のシンボルが、収容型施設のロケーションであると匂わせている。ブレッソンの発言に従えば、収容所型施設というカテゴリーは社会的隔離の極北であり、農村と都市に分類された作品を包含するものである。そのため、このカテゴリーからの論考は別の機会に譲ることにしたい。

(3) ジラールはさらに「媒体と主体が……互いに触れ合うことのないほどに十分離れている場合、われわれは外的媒体と呼ぶことにしよう。この距離が縮小して……重なり合う場合を内的媒体と呼ぶことにする」（ジラール9頁）と二分する。ちなみに表1の原作から明らかなように、ブレッソンには近代ロシア文学をベースにする作品が多く、DVD『たぶん悪魔が』の解説書によれば、このタイトルはドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』のイワンの台詞に由来するという（堀潤一13-4頁）。そのため、ブレッソンの作品から媒体を析出することは、それほど的外れとはいえないだろう。

(4) 浅沼圭司によれば、ブレッソンは、テレビ番組で、この作品に関連してアントワーヌ・ヴァトーの『ジル』のロバやドストエフスキーの『白痴』の伯爵の

ロバの鳴き声の場面にふれているという（浅沼 324 頁）。

(5) この映像はシュレイダーの監督作品である『キャットピープル』（1982 年）の光をたたえてトラムが走るシーン（1:29-1:30）に引用されている。またスティーヴン・スピルバーグの『未知との遭遇』（1977 年）においてフランソワ・トリュフォーと交信する飛行物体の光に満ちたシーンもブレッソンの引用と言われている。

(6) このうち No.8 のシーンは自室でのスリの練習シーンである。マーチン・スコセッシ監督は「ブレッソンの映画には私も心服しているが、『スリ』のなかによく注意してみないとわからないすばらしいシーンがある。……トラビス（『タクシードライバー』の主人公＝筆者注）の場合には、部屋の中で一人で拳銃さばきの練習をする」（トンプソン・D、クリスティ・Ｉ 114 頁）とブレッソン作品の引用を認めている。なおスコセッシの『タクシードライバー』（1976 年）での引用は、映画館のシーンをはさむ主人公の部屋と射撃場のシーン（0:57-1:01）で、『スリ』とともに『抵抗』の脱獄作業のシーンが引用されている。さらに村川透監督は、『殺人遊戯』（1978 年）においてクロス・カッティングでの屋内の練習シーン（0:49-0:52）で『タクシードライバー』のシーンを引用している。

文献

浅沼圭司、ロベール・ブレッソンの研究、水声社、1999 年。

ブレッソン、ロベール、シネマトグラフ覚書―映画監督のノート―(松浦寿輝訳)、筑摩書房、1987 年。

ブレッソン、ロベール、彼自身によるロベール・ブレッソン―インタビュー 1943-1983（角井誠訳)、法政大学出版局、2019 年。

クリスチャン、ミシェル、キリスト教の 2000 年―初代教会から第二バチカン公会議まで―、オリエンス宗教研究所、2004 年。

ジラール、ルネ、欲望の現象学―ロマンティークな虚偽とロマネスクの真実―(吉田幸男訳)、法政大学出版局、1971 年。

シュレイダー、ポール、聖なる映画―小津・ブレッソン・ドライヤー―(山本喜久男訳)、フィルムアート社、1981 年。

ソンタグ、スーザン、反解釈（高橋康也他訳)、竹内書店、1971 年。

トッド、エマニュエル、シャルリとは誰か？―人種差別と没落する西洋―(堀茂樹訳)、文芸春秋、2016 年。

トンプソン、D・クリスティ、Ｉ、スコセッシ・オン・スコセッシ―私はキャメラの横で死ぬだろう―(宮本高晴訳)、フィルムアート社、1992 年。

資料表１　田舎司祭の日記

番号	シークエンス・シーン	おおよその時間	シーン	主人公	コミュニケーション					状　況
					人	イントラパーソナル（日記・ナレーション）等	動物等	信仰	暴力・犯罪	
1	日記	0:01-0:01	日記をつける	○						日記を開く手とナレーション
2	移動途中	0:01-0:03	自転車で移動途中の領主の邸宅	○	領主と家庭教師	冒頭に日記				自転車で移動中、領主宅で領主と領主の娘（以下、娘Ａ）の家庭教師のあいびきを見る。
3	教会	0:03-0:05	教会	○	老人	日記		信徒と話す		司祭に敵対的な貧しい老人が一方的に要求を告げる。
4	トルシーの司祭館	0:05-0:06	司祭館	○	トルシーの司祭			トルシーの司祭に相談		小教区の信徒に関する相談をする。権威的であるべきと忠告される。
5	司祭館	0:06-0:07	夕食の準備	○	村の助役					助役、電気が通じると告げる。助役の問題行動に忠告できず。
6	司祭館	0:08-0:09	司祭館の寝室	○	村人					村人の集まり。その喧騒を一人ベッドで聞く孤独。
7	教会	0:09-0:11	公教要理	○	公教要理の娘（以下、娘Ｂ）・女の子たち	事後の日記		公教要理		子どもが司祭を異性として見て、からかう。
8	教会	0:11-0:12	平日のミサ	○	家庭教師（ルイーズ）・侍者		馬車	ミサ		家庭教師、平日のミサに来る。ミサ中、手で顔を覆い泣く。その後、領主宅に関する話をする。
9	領主宅	0:12-0:13	領主への依頼	○	領主・娘Ａ	事前の日記	犬・狩猟で逃げるウサギ	子どもの施設計画		スポーツ施設設立の希望を伝える。
10	司祭館	0:13-0:16	領主の訪問	○	領主	事前の日記・事後の日記	捕えられたウサギ・犬	司祭館訪問		領主、賛同を伝える。村人に心を開くように助言する。領主、娘Ａの話をされて不機嫌になる。
11	領主宅	0:16-0:19	領主居留守	○	領主・家庭教師・妻・使用人			死んだ子の話		亡くなった男の子の思い出にふける領主の妻と会話をする。司祭、体調を崩す。
12	医師宅	0:20-0:21	診断	○	医師	事前の日記	医師宅の犬	医師の告解		トルシーの司祭の友人の医師に診てもらう。同じタイプと告げられる。司祭、告解と受け取る。酒量に触れられる。
13	道路	0:22-0:23	女の子たちの悪戯	○	娘Ｂ・女の子どもたち	事前の日記		公教要理		司祭をからかう。親から冷たい対応を受ける。
14	司祭館	0:23-0:24	トルシーの司祭の訪問	○	トルシーの司祭	日記	自動車の前を通る馬車	トルシーの司祭と話す		司祭館に送ってくれたトルシーの司祭が、今のままではうまくいかないと忠告。
15	夜の教会	0:24-0:25	祈り	○				祈る		一人、夜の教会で祈る。
16	司祭館	0:25-0:25	匿名の手紙	○		手紙		教会		転任するようにという手紙を受け取る。
17	教会	0:26-0:27	手帳を発見する	○	娘Ａ			教会		手帳の文字が手紙の筆跡と同じであることを知る。持ち主の娘Ａが平日のミサに来る。
18	雨の日の司祭館	0:27-0:30	日記をつける	○		事後の日記		神との距離感		教会に行かず、司祭館にいるが祈れない。神に従おうとするが、孤独に陥り日記を書き続ける。神に捨てられたと感じる。
19	移動・教会	0:30-0:31	医師の死	○	教会職員	日記		教会		移動中に銃声。教会で職員から医師の死を知らされる。
20	教会	0:31-0:33	葬儀ミサ	○	トルシーの司祭		参列者の自動車とともに馬車	葬儀ミサ		医師の死について話し合う。専門性の低さと不信仰があったと話すトルシーの司祭に、自殺の噂を告げる。トルシーの司祭、否定する。
21	夜の司祭館	0:33-0:34	信仰を自問する	○				信仰自問		自分の信仰を自問し、信仰が残っていると感じる。
22	教会	0:34-0:35	教会	○	娘Ａ			教会		娘Ａから、なぜ手紙のことを話さないのかと詰め寄られる。
23	トルシーの司祭館	0:35-0:36	トルシーの司祭館	○	トルシーの職員			相談に行く		手紙をとり上げたことに困惑して、自転車でトルシーの司祭館に行くが司祭は不在。
24	教会	0:36-0:40	領主の娘の話を聞く	○	娘Ａ	娘Ａから手紙をとり上げる。	馬車	神の許しを受けるよう助言		娘Ａ、家庭教師への恨みを述べ、殺したいと話す。神に許しを請うようにとの司祭の指示に従わず。家庭教師と父から寄宿舎に追い出されると告げる。司祭、娘Ａから手紙を取り上げる。娘Ａ、司祭を悪魔と呼ぶ。
25	司祭館	0:40-0:41	手紙を焼く	○		手紙を焼く				手紙を焼き捨て、娘Ａの話を聞くべきでなかったと思う。

26	領主宅	0:41-0:52	領主の妻と話をする	○	領主の妻・娘A、使用人			信徒と問答		領主の妻、夫と家庭教師の現状を受け入れている。心を開かず、男の子の死を天罰ととらえる。司祭が諌め、ミサに行っていると反論するも、心の内を話そうとする。娘A、外からそれを見る。妻、メダイ（メダル）を火に投げる。
27	司祭館	0:52-0:54	領主の妻の手紙	○	教会職員	領主の妻から手紙		信徒と交流		職員から領主の妻の手紙を受け取る。感謝の言葉がつづられる。
28	領主宅	0:54-0:55	領主の妻の死	○	領主	事前の日記		祈り		領主、司祭を無視。司祭、妻の遺体に手を合わせる。
29	領主宅	0:55-0:58	領主の妻の遺体	○	弔問客・領主の妻（遺体）	事前の日記	車 （馬車なし）	公教要理 通夜		遺体のベールをとり、安らぎを祈る。自分にないものを与えたと感じる。弔問客の冷たい視線。
30	司祭館	0:58-1:01	司祭評議員の尋問	○	司祭評議員	記載を拒否		尋問される		領主の叔父の司祭評議員から、死の当日のやり取りを尋ねられる。報告するように求められるが拒否する。
31	領主宅	1:01-1:06	娘Aの話、領主の批判	○	娘A・領主			司祭失格といわれる		娘A、家庭教師を追い出すと話す。体の中にどうしようもない激情が生じたと告げる。領主に家庭教師への手切れ金を渡すように告げる。領主、家庭内に干渉しないように告げ、性格・生活で司祭失格と告げる。
32	司祭館	1:06-1:08	領主の妻とのやり取りを思い出す	○		事後の日記。日記を破る。		神との距離感		領主の妻とのやり取りから得た満足に疑問を感じる。試練が厳しすぎ、神に追従できなくなったと記す。
33	牧場	1:08-1:13	トルシーの司祭との会話	○	トルシーの司祭		牛・犬の鳴き声	トルシーの司祭と話す		トルシーの司祭から食生活や信仰の改善を助言される。信仰が足らない、考えすぎとの助言に、祈れないと答える。聖職は召命であると言われ、涙し、懐かしい気分になり、聖なる苦悩と感じる。トルシーの司祭、涙顔を子どものままと非難し、司祭を責める。娘は悪魔というのに対し、司祭、扉は開けておくと反論する。
34	司祭館	1:13-1:18	トルシーの司祭の再訪（検分）	○	トルシーの司祭			トルシーの司祭を祝福		ワインの飲酒をとがめる。トルシーの司祭に従わない。トルシーの司祭との距離を感じる。
35	信徒宅（夜）	1:18-1:18	体調を崩す	○	女性信徒（母娘）			信徒宅訪問		信徒宅訪問中、体調を崩す。
36	道路（夜）	1:18-1:24	道で倒れる	○	娘A	メモを見る				信徒訪問中に道で倒れる。公教要理で司祭をからかった娘Bが見つけて、介抱。司祭館に戻る途中、娘Bが手をつなぐ。
37	司祭館	1:24-1:25	司祭服を洗う	○		事前の日記				血で汚れた司祭服を洗う。
38	司祭館	1:25-1:31	娘Aの訪問	○	娘B					娘A、転任と勘違いしつつ、荷造りを手伝う。娘Aに嘘をついて会話する。
39	道	1:31-1:37	オートバイに乗る	○	領主の甥		駅に１頭の馬			領主の甥にオートバイで駅に送ってもらう。スピードと甥の会話に若者同士である安らぎと開放感を得る。領主の甥は、司祭と人々の間に違いはなく、いけにえの祭壇の石程度の違いだと話す。
40	医院・道・教会・カフェ	1:37-1:41	病気を知る	○	都市の医師・女主人	事後の日記		教会で祈れず		病気を知り、見知らぬ教会で祈れず、駅のカフェで心を落ち着けながら日記をつける。
41	神学校時代の友人宅	1:41-1:53	神学校時代の友人に会う	○	神学校時代の友人・その愛人	書いている日記を落とす		友人に告解		小教区に戻る気がせず、聖職を離れた友人宅を訪問。下着姿の友人との会話中に体調を崩す。友人の愛人と話す。朝から掃除の仕事をしているという。友人に告解をし、日記をつける。
42	手紙	1:53-1:55	トルシーの司祭への手紙	（十字架）	神学校時代の友人の声	手紙		神の思し召し		トルシーの司祭宛の友人の手紙が読まれる。ロザリオを胸に当て、告解を求めてそれがどうした、すべては神の思し召しと話して亡くなったとナレーションされる。

資料表２　バルタザールどこへ行く

番号	シークエンス・シーン	おおよその時間	シーン	主人公	コミュニケーション					状　況
					人	イントラパーソナル（日記・ナレーション）等	動物等	信仰	暴力・犯罪	
1	農場	0:02-0:05	牧場	B・M	男の子（ジャック、以下J）とその父		ロバ			マリー（主人公の欄はM）、バルタザール（以下、B）に出会う。
2			受洗	B・M	子どもたち		ロバ	ロバの洗礼		マリーと子どもたち、Bに洗礼を授ける。
3			小屋・庭	B・M	子どもたち		ロバ			納屋の二階でBと触れ合う。庭で遊ぶ。
4			農園主の家族の帰宅	M	子どもたちとその父					避暑の農園から帰宅。男の子、ベンチにマリーとの愛の落書き。

5	作業場と道	0:05-0:09	ロバの労働	B	輸送業者		ロバ		ロバへのむち打ち	むち打ちと労働。
6			ロバの労働	B	輸送業者と追跡者		ロバ		ロバへのむち打ち追跡	業者によるむち打ち。馬車が倒れBが逃げる。追われたB，かつて飼われていた家に逃げ込む。
7	マリーの家	0:09-0:10	マリーとの再会	B・M	父		ロバ			父はマリーを呼ぶ声のみ。マリー，Bを優しくなで、自分の家族の移動手段にする。
8	道	0:11-0:12	不良青年ジェラルド（以下、G）の悪質行為	B・M	Gの一味・父		ロバ		不良たちロバを取り囲む	ロバをオートバイで取り囲む。2台の自動車にスリップ事故を起こさせる。その後、マリーの後をつける。
9	マリーの家（夜）	0:12-0:15	Gが忍び込む	B・M	Gら2人		ロバ		ロバを打擲	マリー、花を摘みBに飾り、愛撫する。マリーにGの手が伸びる。G、Bを打擲する。
10	ミサ	0:16-0:17	ミサとその帰り	B・M	ミサ参列者・G		ロバ、馬（馬車）	G、ミサで聖歌隊		G、聖歌隊員としてソロで歌う。自動車と馬車の中、マリー、母とBの馬車で帰宅。
11	公証役場	0:17-0:18	契約の締結	B・M	父・公証人	農園主の手紙	ロバ			父、農園主から農園を借用する契約を結ぶ。しかし父、報告義務はないと主張。マリーとBが外で待つ。
12	自宅	0:18-0:21	マリーとJとの再会	B・M	J・母		ロバ			J、スポーツカーで来村し、マリーの父の疑惑を晴らそうとする。マリーの父を説得できず。母、父を非難する。
13	自宅	0:21-0:22	ロバを手放す	M	父・母		ロバ			父母の対立。マリーがBの世話をしなくなり、父がロバは飼い主が笑われると話し、手放す。
14	パンの配達	0:22-0:27	G，ロバとパンの配達を始める	B	パン店の家族・G		ロバ、パンの配達	司祭がGの就職を依頼	ロバの尾に火をつける	パン店主、Bを購入。司祭からGの雇用を求められ、バイクのGがBとパンを配達。途中、Bにひどい虐待をする。Bの目のクロースアップ。
15		0:27-0:31	マリー、ロバと再会する	B・M	G		ロバ、パンの配達		マリーに暴行	G，道にBを立たせ、自動車のマリーを待ち伏せて、関係を迫る。Bは立っているのみ、目のクロースアップ。G，勝利のラッパを吹く。
16	マリーの家	0:31-0:33	G，マリーの自宅に押し掛ける	B・M	父、G		ロバ、パンの配達			G、マリーの父の前で、マリーを呼び出そうとする。配達の荷を背負ったBはGに連れられている。
17	パン店	0:33-0:35	Gの窃盗発覚		パン店の家族・G					パン屋の店主、Gの窃盗を許し、ラジオを与える。ラジオから軽音楽。
18	マリーの家	0:35-0:35	マリー、Gと密会	M	G・父					納屋でマリー、Gと密会をする。ラジオから軽音楽
19	パン店	0:35-0:37	出頭命令		パン店の家族・G				取り調べ	パン屋の店主家族、Gに警察の出頭命令を渡す。店主の言葉にGは薄ら笑い。
20	警察	0:37-0:40	殺人事件の取り調べ		中毒者（A）、Gの一味				取り調べ	警察によるアルノルド（以下、A）やGの一味の取り調べ
21	アルノルドの家	0:40-0:42	G一味の集団暴力	B・M	A・Gの一味		ロバ・ニワトリ		Aとマリーへの暴力	殺人事件をめぐる対立、Gの一味のAへの殴打と蹴り。仲間となったマリーへのGの打擲。マリーの涙に対してGはラジオをつけて軽音楽。
22	パンの配達	0:42-0:43	震えるロバ	B・M	G		ロバ、パンの配達			パンの配達中、寒さで体調を崩し苦しむB。
23	パン屋	0:43-0:44	ロバの処分	B	G・パン屋の家族・A		横たわるロバ			鉈でBを殺そうとする時にAがBを引き取る。
24	道	0:44-0:46	ロバ、Aに飼われる	B	A、客2人		二頭のロバ			自動車の通る道をA、もう一頭のロバとBを連れて歩く。2匹を移動に使う。
25	アルノルドの家	0:46-0:47	神への誓い		A			禁酒の祈り		A、ベッドでアルコールを絶つことを祈る。
26	酒場	0:47-0:48	二匹のロバへの虐待	B	A		二頭のロバ		ロバへの虐待	酒場の女の手。Aは酔ってグラスを落とし、椅子を持ち出してロバを虐待する。ロバの悲鳴。
27	道	0:47-0:49	ロバの逃走	B	A・マリーの父、裁判所職員		二頭のロバ			A、二頭のロバを連れて街中へ。裁判所前で自動車の横につながれたBの前で、裁判を退席するマリーの父。Aが酒場で飲酒中に、Bは自動車の間を逃げ出す。
28	サーカス	0:49-0:54	サーカスに紛れ込む	B	サーカスの団員・A		ロバ・虎・猿・象		A，Bを追いかける	B，サーカス小屋で虎・猿・象と出会う。訓練をしてサーカスに出演中、飲酒して見物中のAに見つかる。悲鳴を上げて逃げ回るもののAに連れ戻される。
29	アルノルドの家	0:54-0:58	遺産を得る	B	A・Gの一味・警察		ロバ・鶏		G、銃を渡す	G，Aに銃を渡し、警官を殺害させようとする。警官はAに遺産の通知を行なう。
30	酒場	0:58-1:02	どんちゃん騒ぎ	B・M	A・Gとその一味 若者、役人		ロバ		G、店内を破壊。爆竹でBを驚かす	G、Aの遺産でどんちゃん騒ぎ。マリーの母、連れ帰ろうとするがマリーは反発し、Gに従うという。その光景を見るB。Gは、Aを挑発して酒場を荒らす。軽音楽と爆竹の中、マリーはGに捨てられる。

31	酒場	1:02-1:04	酒場から帰る	B	A・Gとその一味		ロバ		G、Bをける	A、最後の言葉を述べて、Bに乗って帰る途中に転落死。
32	役所・家畜市	1:05-1:05	家畜市		(役人の声)	死亡届				Aの死後、Bは家畜市で売られる。
33	労働	1:05-1:07	脱穀作業	B	穀物商		ロバ・牛・山羊		鞭で打ち、働かせる	新しい飼い主の穀物商に鞭で打たれながら、Bが作業をする。
34	労働	1:07-1:08	脱穀作業	B	穀物商		ロバ		鞭で打ち、働かせる	怪我をしながらも作業に従事させられる。
35	穀物商の家	1:08-1:15	穀物商の家を訪れたマリー	B・M	穀物商		光に輝くロバの顔			マリー、雨の日に穀物商の家に来て、彼を手玉に取る。穀物商に金を求める。家の没落を話し、金で関係を持つ。それを見るBの目。朝、マリーはBを無視して出て行く。
36	穀物商の家	1:16-1:17	マリーの両親が訪れる	B	穀物商・マリーの両親		ロバ			穀物商、来訪したマリーの両親にBを返す。
37	マリーの家	1:17-1:17	マリーが帰宅する	B・M	マリーの両親		ロバ			両親がBを連れて家に戻るとマリーが帰っている。
38	マリーの家	1:17-1:20	Jとの再会	B・M	J		ロバが草をはむ	Jを愛したい		Jが自動車で来て、ベンチに座りマリーに救いの手を差し伸べる。老いたBは草を食べている。J、マリーに結婚を申し出る。マリーは断りつつ、Bに藁を与えながら、愛したいとつぶやく。
39	作業小屋	1:20-1:22	納屋でGに対峙する	M	Gの一味		ロバ		Gの一味、マリーに集団暴行	Gとその仲間に服を脱がされて、裸にされる。B、マリーを乗せて父やJたちとともに自宅に戻る。
40	作業小屋・マリーの家	1:22-1:25	父とJの前で	B・M	マリーの両親・J		ロバ	司祭、病者の塗油		裸にされたマリーが家から出て行く。家の外につながれたB。父は司祭から病者の塗油を受けるが、司祭に背を向ける。司祭、聖書を持ち、皆を許しなさいと告げる。
41	マリーの家	1:26-1:26	マリーの父の死	B・M	マリーの母		ロバの影、頭	神に祈り		家の外で夫の治癒を祈る。その横につながれたB。夫の死。
42	マリーの家	1:26-1:27	Gによるロバの連れ出し	B・M	マリーの母・Gの一味		ロバ	G、ロバの連れ出し		G、マリーの母からBを借り出す。マリーの母、Bしかいない、Bは聖なるロバというものの、連れ出される。B、マリーの父の葬列に使われる。
43	マリーの家	1:27-1:29	Gによるロバの連れ出し	B	Gの一味		暗闇のロバ		Gの一味、密輸の準備	G，勝手にBを連れ出し、密輸（国境の山越え）に利用しようとする。
44	夜の山越え	1:29-1:32	密輸に使われる	B	Gの一味		ロバ		G，Bを蹴り飛ばす	夜道、荷を背負うBをG、木で殴り蹴り飛ばす。警備兵に見つかりそうになりBを置いて逃げるGの一味。Bの顔のクロースアップ。銃声に驚き、ひとり進む。
45	山頂付近	1:32-1:32	ロバの死	B			ロバ・羊の大群・犬			Bの目のアップ。銃声に呼びえる。足を撃たれたBが力尽き横たわる。聖衣をつけたように羊がBに集まり、羊に囲まれて命が絶える。羊が去った後に一頭だけのBが横たわる。

資料表3　少女ムシェット

番号	シークエンス・シーン	おおよその時間	シーン	主人公	コミュニケーション					状　況
					人	イントラパーソナル（日記・ナレーション）等	動物等	信仰	暴力・犯罪	
1	教会	0:00-0:00	母の祈り（アヴァン・タイトル）		母			母の教会での祈り		教会で、子供が心配で死ねないとつぶやく。
2	森	0:02-0:05	森番が密猟を探す		森番・密猟者		鳥			森番が密猟を見つめる。見つめる目のクロースアップ。密猟者、罠に捕らえた鳥を逃がす。
3	道	0:05-0:06	登校	○	子ども					ムシェットと森番がすれ違う。
4	カフェ	0:06-0:09	店員へのさや当て		密猟者・店の女性・森番・客父親と仲間					密猟者、カフェで飲酒。森番が来て飲酒。次々に来る車の客。犯罪に関係する父と仲間も店に入る。
5	自宅	0:09-0:11	不幸な家族状況	○	母・父・乳児					病気の母の介護をする。父、夜間に戻り酔ってハンドルを回す真似をする。

6	学校	0:11-0:12	通学の情景	○	子どもたち					急ぐ子供の中で、ゆっくりと向かう。
7		0:12-0:13	教室での教師の叱責	○	教師・子どもたち	教員の背に小さく黒板の文字			女教師の体罰	教師の冷たい目。教師、歌を唄わないムシェットの首をつかみ、見せしめをする。ムシェット、両手で顔を覆い泣く。
8		0:13-0:15	下校時の嫌がらせ	○	子どもたち				ムシェットと男子の悪戯	ムシェット、草陰に隠れて同級生に土を投げる。一人残り、下校。男子生徒にからかわれる。
9	自宅	0:15-0:15	家族状況	○	母					ベッドに横たわる母（手）に帰宅を告げる。
10	カフェ	0:15-0:18	開店準備	○	店員・父・森番					教会前のカフェで着替えながら、コーヒーを準備。
11	教会	0:18-0:19	カフェの営業を終えてミサに向かう	○	店員・父・森番・ミサに急ぐ信徒			教会	父の突き飛ばし	ミサの始まりを告げる鐘。ミサに向かう客が酒を飲む。森番、店員に言い寄る。ムシェット、いやいや向かう教会の前で父に教会内に突き飛ばされる。
12	カフェ・移動遊園地	0:19-0:27	カフェの営業	○	父・男・観客・店員・密猟者・森番			教会のミサ帰りの信徒は正服		ムシェットの皿洗いの賃金を客席の父がとり上げ、仲間に酒を飲ます。ムシェット、移動遊園地に向かい、知らない男から金をもらいゴーカートに乗り、男と仲良くなる。男に誘われそうになり、父が頬を張る。密猟者と店員が遊園地の飛行機に乗るところを見る森番。カフェに戻った店員に森番が、密猟者を殺すと告げる。
13	自宅	0:27-0:27	家庭の状況	○	父・母					父、森番と密猟者の確執を話す。母はベッド。
14	学校	0:27-0:29	下校時の嫌がらせと孤独	○	子どもたち				ムシェットの悪戯	草に隠れ、同級生に泥投げの嫌がらせをする。男たちがバイクで女の子を向かえにくるのを見る。森に入る。
15	森	0:29-0:34	森に入る	○	密猟者・森番				密猟者と森番の喧嘩	銃声を聞く。雨宿りをして夜になる。ぬかるみで靴を脱ぐ。密猟者と森番が争いを始める。もみあいの喧嘩の途中、二人は酒を飲み始める。
16	森	0:34-0:41	密猟者と出会う	○	密猟者					濡れた靴下を絞っているとライトを持った密猟者が来て、小屋に案内する。密猟者は酒を飲み、ムシェットに飲ます。会ったことを隠すように命じる。密猟者、ムシェットの靴を探しに出て、靴を持ち帰る。密猟者は火で傷の手当をし、灰を周りにまき、台風が来ると話す。
17	密猟者の部屋	0:41-0:53	密猟者に暴行される	○	密猟者				密猟者に暴行される	密猟者、ムシェットに部屋にいたと証言するように頼み、酔って覚えてないが森番を殺したかもしれないと告げる。ムシェット、皆が嫌いだから密猟者のために証言するという。密猟者が倒れ、ムシェットが介抱する。ムシェット、学校で無理やり歌わされた歌を唄う。歌を聞いた密猟者、カバンを持ったムシェットを自室に入れ、ムシェットの行き先をふさぎ、追いかけて凌辱する。
18	自宅	0:53-0:59	自宅に帰り、泣く	○	父の声、母、乳児					一人自宅に帰り、母から乳児のミルクづくりを頼まれる。ミルクを飲ませながら泣く。おむつ替えを頼まれる。おむつで涙をふく。
19	自宅	0:59-1:03	母の後悔	○	母					朝、泣きながらベッドから起きる。母に出来事を告げようとするものの、できない。母から酒を持ってくるように頼まれる。楽に死にたい、自分はバカだった、悪い男にだまされないように話す。母の死。父と仲間、帽子をとって入ってくる。
20	自宅	1:03-1:04	自宅の状況	○	父					娘をとがめる父。反抗しつつ、ミルクを買いに行くムシェット。
21	カフェ	1:04-1:06	店の女性による屈辱	○	店の女性				ムシェットを非難	母が死んだムシェットに優しくする店員。しかし、ムシェットの胸の傷を見てふしだらという。ムシェット、反抗的に出て行く。教会に行く人を見る。
22	道・森番宅	1:06-1:08	森番の出現	○	森番					死んだはずの森番が姿を見せる。
23	森番宅	1:08-1:12	森番夫妻の追求	○	森番・妻				森番の妻の言葉の追い打ち	密猟者が警察に逮捕され、ムシェットといたと主張しているという。ムシェットが密猟者に会ったと告げると、一晩中、小屋で何をしていたか、飲酒以外にも何かあったかと妻が追及する。むごいことをする男を許せないという妻に、ムシェット、密猟者の愛人だと話す。
24	道	1:12-1:15	老女宅に呼ばれる	○	老女					ムシェット、老女に呼び止められ、棺の布と服を提供される。老女、死者は神と同じと話す。ムシェット、反抗的態度と眼差しで出て行く。
25	森	1:15-1:17	狩猟	○	猟師		ウサギ、犬		銃で撃たれ追われるウサギ	狩猟の銃声と犬。逃げ惑ううさぎと銃を撃つ猟師。撃たれたウサギを見つめるムシェット。
26	川辺	1:17-1:20	自殺を図る	○	トラクターで過行く男				自殺をする	貰った服を体に当て、斜面を転がる。トラクターに乗ろうとするが過ぎ去る。再度、斜面を転がり川岸に立ったする。もう一度ころがり、水に落ちる音と波。

資料表４　スリ

番号	シークエンス・シーン	おおよその時間	シーン	主人公	コミュニケーション					状　況
					人	イントラパーソナル（日記・ナレーション）等	動物等	信仰	暴力・犯罪	
1	―	0:01-0:02	日記　以下略	○		日記を書く				実行者だが日記を記すと書く。手の映像。
2	競馬場	0:02-0:05	初めてスリを働く	○	客・職員		（馬の音）		スリ	初めて女性客にスリを働く。バックを探る手先のアップ。５分後に逮捕され、警察に連行される。
3	警察署	0:05-0:05	取り調べ	○	警部				警察	取り調べの後、釈放される。
4	自室	0:05-0:06	ベッドに横になる	○						扉の空いた部屋。ベッドに横たわる。
5	母のアパート	0:06-0:07	金を届ける	○	ジャンヌ（母の隣人）					母に合わず、ジャンヌに金を渡す。
6	夜のカフェ	0:07-0:11	警部に会う	○	ジャック（友人）・警部					ジャックと酒を飲んでいると、警部に会う。許される犯罪という自分の見解を話し、警部に諌められる。
7	地下鉄	0:11-0:12	スリを働く	○	乗客				スリ	スリを働く。もう一度、スリを働く。
8	自室	0:12-0:13	スリの練習	○					スリの練習	物音に反応。スリの練習をする。オーバーラップ
9	地下鉄・駅	0:13-0:15	スリを働く	○	乗客				スリ	一人では無理と感じる。スリを働き、財布をベンチ下に捨てる。自信を得る。
10	夜のカフェ	0:15-0:16	ジャックの忠告	○	客・警部・ジャック					ジャックが、警部が見通していると知らせる。仕事を探すように話す。
11	地下鉄駅・地下鉄	0:16-0:18	地下鉄駅・地下鉄	○	乗客				スリ	スリを働いた相手から財布を返すように命じられる。
12	自室	0:18-0:21	ジャックとジャンヌの訪問	○	怪しい人物（スリ仲間Ａ）・ジャック・ジャンヌ				スリ仲間に知り合う	数日、食事以外は部屋にこもる。アパートの外に怪しい人物がいて、ついて来るように相図をする。ジャックとジャンヌが来る。母が会いたいと話しているとジャンヌが伝える。
13	道・カフェ	0:21-0:23	スリ仲間に入る	○	怪しい人物（スリ仲間Ａ）				スリ仲間に知り合う	怪しい人物について来るように求められ、光をたたえたバスに乗る。カフェで、怪しい人物がスリと知り、技術を教えられる。手のアップ。指を柔らかくし、鍛えていることを見る。
14	自室	0:23-0:24	自宅を出る	○		ジャンヌの手紙				ジャンヌの手紙がドア下に入っていたことにようやく気付く。
15	母のアパート	0:24-0:25	母に会う	○	母・ジャンヌ					母は、ジャックがミシャエルはよくやっていると話しているという。
16	教会	0:25-0:26	葬儀ミサに出る	○	ジャック・ジャンヌ			葬儀ミサ		椅子に座る３人。涙を流すミシェル。
17	自室	0:26-0:28	母の荷物をジャンヌと持ち帰る	○	ジャンヌ			死後の裁きの話		ジャンヌと母の荷物を部屋に持ち帰る。死後の裁きを信じるかジャンヌに尋ね、くだらないという。
18	銀行・道	0:28-0:30	スリを働く	○	客・スリ仲間Ａ	事前の日記			スリ	二人で組んでスリを働く。
19	カフェ	0:30-0:31	新しい仲間に会う	○	スリ仲間Ａ・Ｂ				分配	金額を分ける。次は三人でスリを働くと伝えられる。
20	自室	0:31-0:32	ジャックが訪問する	○	ジャック					ジャック、机の上のスリ名人の本を見つける。見解が分かれる。
21	カフェ	0:32-0:34	警部と犯罪の話をする	○	ジャック 警部					警部が近づき、犯罪に関する話をする。警部、ジャックが借りたスリの本を見つける。ジャックに疑っているだろうと尋ねて、本を取り返す。
22	警察署	0:34-0:36	警察に呼び出される	○	警部					呼び出した警部に本を渡す。スリの道具を見せられ。本を返される。
23	自室	0:36-0:37	自室を確認する	○						警察の罠と心配して、自室に戻る。
24	道・カフェ	0:37-0:38	スリを働く	○	通行人				スリ	一人で時計をする。
25	自室	0:38-0:38	手口を確認する	○						時計をスる手口を再現。
26	自室・遊園地	0:38-0:40	スリを働く	○	ジャック・ジャンヌ・客				スリ	日曜日、カフェで時間を過ごす。ミシェル、客の時計に目が行き、遊園地の飛行機に乗る二人から離れて、スリを働く。
27	自宅	0:40-0:43	ジャックの訪問	○	ジャック					怪我をした傷を手当てする。ジャックが来て、心配していると話す。ジャックにジャンヌと愛し合っているだろうと聞く。
28	駅・列車	0:43-0:47	スリを働く	○	スリ仲間Ａ・Ｂ、乗客	事前の日記			スリ	三人で繰り返しスリを働く。手のアップ。

29	自室前の通路	0:47-0:48	ジャックがジャンヌの召喚を伝える	○	ジャック	警察の召喚状			警察の召喚状	ジャックから警察のジャンヌへの召喚状を見せられる。冷たい態度を見せる。
30	駅	0:48-0:49	連行されるスリ仲間	○	警官、スリ仲間A・B、乗客				仲間の逮捕	スリ仲間が逮捕される。
31	自室	0:50-0:54	警部の訪問	○	警部				警部の訪問	警部が訪問する。ミッシェル、つきまといを怒る。母への窃盗をジャンヌが取り下げたことを知る。警部、自白を迫る。うんざりと答える。警部、将来を心配し、その後、逮捕を予告する。
32	ジャンヌ宅	0:54-0:57	ジャンヌと別れる	○	ジャンヌ					ジャンヌ宅を訪問し、ミシェル、訴えの取り下げが母の意思と知る。自分ことを尋問されたかと聞く。ジャンヌ、両手で顔を覆い、最低の行為と非難する。ミッシェル、ジャンヌは周りに寛容すぎ、単純という。自分をスリと思うかと尋ね、ジャンヌはそうだと答えながらもすがりつくが、ミシェルは去るという。
33	自室	0:57-0:58	旅の準備	○						旅をするため、金と時計を取り出す。
34	道・駅	0:58-1:00	移動する	○						タクシーに乗り、駅でミラノ行の列車に乗る。
35	日記	1:00-1:00	日記の文字	○		日記			スリと放蕩	イタリアからイギリスに渡り、2年間スリを働いたことをつづる。
36	ジャンヌ宅	1:00-1:02	ジャンヌに再会する	○	ジャンヌ 乳児					ジャンヌはジャックと暮らしていたが、ジャックが消えたことを知る。ジャンヌは、ジャックを愛していなかったと告げる。ミシェル、堅気になりジャンヌの力になると告げる。
37	役所・カフェ・ジャンヌ宅	1:02-1:03	ジャンヌに金を渡す	○	職員・求人者・ジャンヌ					役所の給付金をジャンヌに渡す。
38	ホテル	1:03-1:04	客の新聞を覗く	○	客		新聞に馬の写真			客の新聞で競馬場を思い出す。
39	競馬場	1:04-1:07	スリを働く	○	警官・客				スリ	ホテルにいた客を疑いながらもその客にスリを働く。手錠をかけられる。手のアップ。
40	拘置所の面会室	1:07-1:09	ジャンヌの面会	○	ジャンヌ・看守				留置所	失敗したこと、予審で自白を覆す自信を告げる。
41	独房	1:09-1:10	孤独に落ちいる	○			ジャンヌの手紙			ジャンヌが来ないことを寂しく思う。その理由を手紙で知る。
42	独房・面会室	1:10-1:11	ジャンヌの面会	○	ジャンヌ・看守			愛を知る		ジャンヌと心が通じ合う。愛を知る。

資料表 5　たぶん悪魔が

番号	シークエンス・シーン	おおよその時間	シーン	主人公	コミュニケーション					状　況
					人	イントラパーソナル（日記・ナレーション）等	動物等	信仰	暴力・犯罪	
1	新聞記事	0:02-0:02	墓地での死亡記事	△写真						墓地で青年の死の新聞記事。シャルルの写真。
2	大学とその周辺	0:02-0:04	6ヶ月前の政治集会	○	路上の友人・ヴァランタン・ミシェル・エドヴィージュ					政治集会で、批判的態度を示し、途中退席する。
3	環境保護協会	0:04-0:08	環境破壊の映像の上映		ミッシェル・アルベルト スタッフ					環境破壊の映像の上映。
4	アルベルト自宅	0:08-0:10	アルベルトが家を出る	○	ミッシェル・アルベルト・エドヴィージュ					エドヴィージュの運転する車でシャルル、迎えに来る。
5	シャルル宅	0:10-0:10	アルベルトと同居する	○	アルベルト・エドヴィージュ					エドヴィージュ車で帰り、アルベルト、シャルル宅に来る。
6	教会	0:10-0:15	司祭との討論会	○	アルベルト・エドヴィージュ・司祭・若者・書店主（エドヴィージュの愛人）			教会で司祭との討論		パイプオルガンの鳴る中、現代のキリスト教に関する議論。若者が批判的で、途中で帰る。エドヴィージュの愛人（書店主）が本に彼女の裸体の写真をはさむ。
7	書店	0:15-0:16	愛人を批判する	○	書店主・スタッフ	本を開く				シャルル、写真を入れた書店主を批判。
8	エドヴィージュの愛人宅	0:16-0:19	関係を結ぶ	○	書店主 エドヴィージュ					部屋で関係を結ぶ。外で待つシャルル。

9	路・シャルル宅	0:19-0:22	青酸カリを発見する	○	アルベルト ミシェル	シャルルのノート				ミシェル、エドヴィージュの存在を聞く。アルベルト、青酸カリとノートを見せて、シャルルが自殺しようとしていると告げる。シャルル戻る。
10	大学とその周辺	0:22-0:23	大学を去る	○	路上の青年	数学のノート				シャルル、青年に数学の問題を解いてやるものの、二度と会わないと告げる。
11	大学とその周辺	0:23-0:24	シャルルを追求	○	ミシェル					ミシェルがシャルルに対し大学のこと、2人の女性のことを責める。
12	シャルル宅	0:24-0:25	シャルルを追求	○	アルベルト ミッシェル					アルベルト、ミシェルを非難。
13	森	0:25-0:27	森林の伐採	○	ミッシェル・伐採人					木を切る光景。耳を抑えるシャルル。
14	自動車・環境保護協会	0:27-0:30	地球環境の議論 映像の上映	○	ミッシェル・スタッフ					地球環境、生活に関して議論する。環境破壊の映像を上映する。
15	自動車・環境保護協会	0:30-0:31	シャルル、非難され車を降りる	○	ミッシェル エドヴィージュ					生活の議論に、シャルルは享楽を求めると答える。エドヴィージュの車に乗り換える。
16	知人女性宅	0:31-0:32	シャルル、追い出される	○	知人女性					関係後、追い出される。
17	川原・道	0:32-0:34	自殺願望を問われる	○	ミッシェル					自殺願望をミッシェルが尋ねる。
18	シャルル宅	0:34-0:36	シャルルが消える		アルベルト・ミシェル					アルベルト、シャルルが消えたことを話す。
19	書店	0:36-0:37	話をする		アルベルト・ミシェル 書店主	本を開く				ミシェル、本を見ながら、書店主を偽善者という。
20	アルベルト自宅	0:38-0:39	パーティの食材を取りに帰る		アルベルト・ミシェル					食べ物とワインを取りに帰る。
21	川原	0:39-0:42	銃を盗む	○	若者				銃を盗む	音楽演奏。シャルル、友人から銃を盗む。友人が探し始める。
22	シャルル宅	0:42-0:43	パーティの準備		アルベルト・ミシェル					ミシェル、シャルル宅でパーティの準備をする。
23	川原	0:43-0:44	銃声がする	○	路上の若者				銃を撃つ	シャルルを探す中、銃声。川を撃つシャルルから銃を取り戻し、酒を飲みながら音楽を聴く。
24	シャルル宅	0:44-0:46	シャルル戻る	○	アルベルト・ミシェル					シャルル、パーティ中の部屋に戻る。夜、アルベルト、ベッドでシャルルの横で泣く。
25	道	0:46-0:47	結婚の話をする	○	ミシェル					シャルル、アルベルトと結婚すると話し、二人でバスに乗る。
26	大学	0:47-0:49	原発容認の授業に反発する	○	教師・学生・ミシェル					原爆映像と原発の安全性を伝える授業。受講者から批判の質問。
27	道・バス	0:49-0:51	原発容認への非難	○	ミシェル・乗客				バスが事故を起こす	原発容認の教師に対する批判。バスの乗客が議論する。乗客が「たぶん悪魔が」と言った後にバスの事故とクラクション音。
28	郊外・公園	0:51-0:55	気持を話す	○	ミシェル アルベルト・エドヴィージュ		釣られた魚		警察の取り締まり	シャルル、自分の気持ちを話す。郊外の汚染のため遊泳禁止の場に警察車両が来る。集まった人が隠れる。
29	シャルル宅	0:55-0:58	シャルル、戻らなくなる		書店主 アルベルト・ミシェル					書店主、アルベルトに自分の家に来ないかと言い、金を渡そうとする。ミシェルが来て、シャルルの不在を告げる。アルベルト、ベッドで泣く。
30	食料品店	0:58-0:59	友人を見つける	○	ヴァランタン エドヴィージュ				ヴァランタンの万引き	薬物中毒のヴァランタンの姿をシャルル、エドヴィージュの車に乗って見かける。
31	エドヴィージュ宅	0:59-1:00	ヴァランタンを家に入れる	○	エドヴィージュ ヴァランタン					ヴァランタンを家にあげて、食べさせる。
32	道	1:00-1:01	薬物の取引	○	薬物密売者				薬物購入	シャルル、ヴァランタンのために薬物を買いう。
33	エドヴィージュ宅	1:01-1:04	ヴァランタンの背をさする	○	ヴァランタン				薬物を与える	シャルル、ヴァランタンに薬物を与え、世話をする。
34	教会	1:04-1:09	教会で寝る	○	ヴァランタン、警官	ユゴーの本を読む		教会に一緒に行こうと話す	ヴァランタンの献金窃盗	夜の教会で教会音楽を聴きながら寝袋で寝る。ヴァランタン、一人起き出して献金を盗み、逃げる。警察車両が来る。寝ているシャルル、拘束される。
35	教会	1:09-1:10	警察署	○	警官	チラシ・書類			逮捕、警察へ	シャルル、容疑を否認。

36	エドヴィージュ宅	1:10-1:12	シャルルが消える	○	ミシェル アルベルト・エドヴィージュ					エドヴィージュがシャルルを介抱する。ミシェルとアルベルト、外で抱き合い、戻るとエドヴィージュがシャルルが消えたと告げる。
37	精神科医宅	1:12-1:19	精神科医の治療を受ける。	○	精神科医・ミシェル・アルベルト・エドヴィージュ	チラシを読む。精神科医がメモを取る。				診察を受ける。対立的なやり取りで、精神科医の欺瞞をあばく。信仰と自殺は対立しないと答える。シャルル、地方の裕福な家庭の出身や性体験等を話す。エドヴィージュたち、電話でやりとりを聞く。死の願望と次回の診察日、料金を告げる。
38	エドヴィージュ宅	1:19-1:21	シャルル逃げ出す	○		手紙を書く				エドヴィージュに置手紙をし、金を持ち出す。
39	川原	1:21-1:23	知人から銃を買う	○	路上の若者				銃の購入	シャルル、銃を買う。
40	ヴァランタン宅	1:23-1:24	ヴァランタンに殺害依頼	○	ヴァランタン					金を渡し頼みごとをする。
41	地下鉄駅・地下鉄・カフェ	1:24-1:30	地下鉄に乗り、自殺場所の墓地に向かう	○	ヴァランタン・乗客					一緒に地下鉄に乗り下車。歩く途中にカフェで酒を飲み、墓地へ向かう。途中、道沿いの家のテレビに見とれるシャルルをヴァランタンが急かす。
42	墓地	1:30-1:32	シャルルの殺害	△死体	ヴァランタン				殺害と窃盗	ヴァランタンに銃を渡す。ヴァランタンがあっさり殺害し、シャルルの金を奪い逃げ去る。

資料表 6　ラルジャン

番号	シークエンス・シーン	おおよその時間	シーン	主人公	コミュニケーション					状　況
					人	イントラパーソナル（日記・ナレーション）	動物等	信仰	暴力・犯罪	
1	少年の家庭	0:02-0:03	親からの小遣いでは金を返せず		少年・父母					中流家庭の少年、小遣いを親に求めるが、一定額のみ与えられる。
2	別の少年宅	0:03-0:04	贋札を渡す		別の少年					少年、別の少年宅で贋札を受けとる。
3	カメラ店	0:05-0:08	贋札行使に成功する		2人の少年、店主の夫婦					疑われるも贋札で額縁を購入して釣銭を得る。対応した妻を夫が激怒。
4	カメラ店	0:08-0:09	イヴォン、贋札をつかまされる	○	店員・店主					イヴォンの石油会社への支払いに、店主、贋札を使用する。
5	石油会社	0:09-0:09	会社に戻る	○						タンクローリーから降りる。
6	カフェ	0:09-0:10	経営者と争う	○	経営者				突飛ばす	贋札を使用したと言われて暴力。警察が呼ばれる。
7	カメラ店	0:10-0:11	実況検分	○	警官・カメラ店主・店員				警察の実況検分	カメラ店で贋札の使用の実況見分。店主の命令で、店員はイヴォンに贋札で支払ったことを否定する。
8	自宅	0:11-0:12	手で顔を覆う	○	妻子					手で顔を覆う夫、弁護士に相談するように妻が助言する。
9	弁護士事務所	0:12-0:13	相談	○	弁護士・妻					弁護士に弁償を提案される。
10	法廷	0:13-0:15	訴訟の却下	○	弁護士・カメラ店主・店員					訴訟が却下される。カメラ店主、偽証した店員に金を渡す。
11	カメラ店	0:15-0:16	偽証の確認		店員・店主					偽証を心配する店員に店主、大丈夫と告げる。
12	石油会社の外	0:16-0:16	イヴォンの解雇	○	妻子					会社を解雇される。
13	カメラ店	0:16-0:19	店員、カメラ店から解雇される		店員・店主・客店員の友人2人				店員、売り上げを詐取	店主、店員の不正をあばき、解雇する。店員、仲間に店の金庫のカギの複製を見せる。バイクで帰る途中、店主の妻に悪態をつく。
14	学校	0:19-0:21	贋札使いの判明		店主の妻・学校の司祭 少年たち			司祭が生徒に尋ねる		店主、贋札使用の文句を言いに学校に行く。担当の司祭が生徒を問い質し犯人の少年が分かる。少年、バイクで帰宅。
15	少年宅・カメラ店	0:21-0:23	事件を葬る		少年・母・カメラ店主					母は少年に認めるなと告げて、カメラ店に弁償に行く。父、少年を叱る。
16	カフェ	0:23-0:25	銀行強盗に誘われる	○	友人				強盗に誘われる	友人に銀行強盗に誘われ、車両担当を引き受ける。
17	自宅	0:25-0:25	家族に秘密を持つ	○	妻子					イヴォン、妻には何も話さず家を出て行く。

18	路上	0:26-0:29	逮捕される	○	通行人・警官				逮捕される	自動車内にいるところを逮捕される。
19	警察	0:29-0:30	面接に来る		妻・警官				夫に会えず	妻が警察に呼び出されて、夫が留置所にいることを知る。
20	法廷	0:30-0:33	有罪判決を受ける	○	裁判官他、傍聴人・妻子				有罪	禁固刑の有罪判決を受ける。
21	刑務所	0:33-0:34	刑務所に収監される	○	刑務官・受刑者				収監	刑務所に移送される。
22	カメラ店・地下鉄	0:34-0:36	元店員、カメラ店で窃盗		カメラ店主・元店員たち				盗難	金庫が荒らされる。元店員たち、地下鉄で逃走する。
23	面会室	0:36-0:38	妻、面会に来る	○	妻				収監中	面会よりも移動の方が、長く映る。妻、黙って出て行く。
24	キャッシュ・デスペンサー	0:38-0:41	元店員の窃盗		元店員たち				強盗	元店員たち、キャッシュ・デスペンサー強盗を働く。
25	刑務所	0:41-0:43	子どもの死を知る	○	同房者A・郵便の担当者	同房者手紙を読む			収監中	妻から子どもの死を告げる手紙が届く。飲酒中の同房者に共感はない。
26	カメラ店	0:43-0:45	カメラ店主への手紙		カメラ店主	手紙を送る			脅迫	店主に元店員から、店主の仕打ちの非難と自分の行為の反省の手紙（脅迫）と小切手が届く。
27	刑務所	0:45-0:49	食事中に暴れる	○	郵便担当者・受刑者・刑務官				金具を振り上げる	妻への手紙が返送される。他の受刑者と交流。手紙のことを他の受刑者に話されて、食事中にあばれる。独房に入れられる。
28	刑務官	0:49-0:49	郵便担当		郵便担当者	手紙を読む				妻からのもう会えないという手紙が保留になる。
29	刑務所	0:49-0:52	自殺を図る	○	看守・医師				自殺を図る	独房で睡眠薬をため込み、自殺を図る。救急車で病院に運ばれる。それを見た受刑者の一人が祈る。もう一人は祈らない。
30	病院	0:52-0:53	治療を受ける	○	医師・看護師	手紙が置かれる				集中治療を受ける。
31	法廷	0:53-0:53	元店員の主張		元店員たち				裁判	元店員、法廷で貧者に財産の分配をしたと訴えるが、認められず。
32	刑務所	0:53-0:55	刑務所に収監・帰還		元店員・刑務官				収監	元店員の収監と同時に、イヴォンが救急車で戻ってくる。
33	刑務所	0:55-0:56	同房との会話	○	同房者B	同房者、本を持つ				思想的な話をして、イヴォンにミサに行くなという。
34	刑務所の聖堂	0:56-0:58	ミサに出る	○	元店員・受刑者・司祭			ミサに出る	脱獄の相談	ミサ中にやりとりする受刑者。元店員と隣席になる。元店員が脱獄をもちかけるが、イヴォンは殺したいと拒否する。
35	刑務所	0:58-1:00	元店員の脱獄未遂	○	同房者B				脱獄をはかる	元店員が脱獄失敗。厳しい収容施設に送られることになり、同房者Bがイヴォンに手を汚さず復讐をとげたと言う。
36	刑務所・街	1:00-1:03	強盗殺人を行う	○	刑務官・ホテル経営者夫妻	出所票			強盗殺人	出獄し、安ホテルに入る。夜間、経営者夫妻を殺して金を奪い歩き去る。
37	郵便局前	1:03-1:06	金を奪おうとする	○	中年女性・郵便局員		犬		ターゲットを物色	イヴォン、郵便局で金を下ろした女性の後をつけ、家についていく。
38	女性の家	1:06-1:09	女性宅に入り込む	○	中年女性 父・おい		犬	神の許しについて話す		女性宅で、殺人の理由を問われ、面白いからと答える。女性、食事を与えながら、私が神なら皆を許すと語る。室音におびえるイヴォン。女性が家族の犠牲になっていることを知る。テールランプが光るバスが去って行く。
39	女性の家	1:09-1:12	女性、父に叱られる	○	中年女性・父				父、女性を平手打ち	女性、イヴォンをかくまっていることを父にとがめられ平手打ちされる。イヴォン、斧を見つける。
40	女性の家	1:12-1:14	家庭の状況	○	中年女性・父・甥		犬			父が弾くピアノ、アイロンをかける女性、車椅子の甥。落ちたグラスの破片を集める手。
41	畑	1:14-1:17	金を物色する	○	中年女性				金の物色	畑仕事を手伝う。女性が買い物に出た間に、イヴォンが金を物色する。
42	街	1:17-1:17	買い物		中年女性					女性が買い物をし、帰宅する。
43	女性の家	1:17-1:20	女性との会話	○	中年女性					女性が洗濯中、イヴォンが家の犠牲者なのになぜ自殺しないか尋ねる。洗い物を干す手伝いをし、女性に木の実を与える。
44	女性の家夜	1:20-1:22	女性の家族を殺す	○	父・中年女性の姉妹・甥		犬		強盗殺人	イヴォン、家の鍵を斧で開けて、各部屋を回り、家族を殺害する。女性の部屋では斧で灯りを破壊するシーンのみ。
45	カフェ	1:22-1:24	自首する	○	客・店員					イヴォン、カフェで酒を頼んで飲み、警官に二つの殺人を告白。バルタザールの最期のように客が集まる。警官に連行される。

注：シーン・シークエンスは筆者の独自の判断によるものである。